

筑
前

芦屋案内記

附 石造物と歴史を訪ねて

筑前芦屋旧跡巡り

筑前菅屋旧跡巡り

— 石造物を訪ねて —

題
字

柴
田
正
生

石造物の調査については約二十年程以前、たまたま山鹿浦区巖島神社下の岩板上にある大鳥居の下に行った時、寄進者の名が刻み込んであるのに気がつき、その名前を見ると雨・風・打ちつける波浪のためか刻んである文字が判読しにくくなっていて、気がついた。今後三十年、五十年と月日がたつにつれて、刻んである文字が現在よりもさらに判りにくくなるのではなかるうか、これ以外の石造物にも之と同じような状態や、また風化欠損して形の無くなるものも出来てくるのではなかるうか、今のうちに調査して記録しておかないと、年がたつにつれて判からなくなるものが出来るのではないかと思ひ、山鹿地区の石造物だけでも調べて書き残しておけば、何かの参考になりはしないかと思ひ立ち仕事の暇々に調査を始めた。

歩き廻っているうちに、年代の古いのに最近刻んだようにはつきりしたものもあり、年代の新しいのに表面が剥脱したもの、刻字の判読しにくいもの等に出くわした。同じ所に何度も足をはこんでいるうちに、日によって又天候の具合によつて、以前来た時には判読出来なかつたものが、日によつては判読出来る面白さも体験出来て益々面白くなつてきた。山鹿地区が一通り終つてから芦屋地区にも足をはこぶようになり、思ひもよらず芦屋全部の旧跡廻りをする事になった。昭和四十七年「芦屋町誌」が出版されたので、之を購読し今まで調べていなかった所にも足をのばし調べてまわつた。

最初は運動にもなるし自分だけの楽しみで始めたのだが、最近になつて之を一般に公表することに、多くの人に喜んでもらえるのではないかと考え出版を思ひ立つたのである。郷土の何代か前の祖先が善意を込めて建立し奉納したこれ等のものを、現代の人が此の書を見ることに依り、曾祖父また祖父が、何所其所に何を寄進してあるという事を知ることのよすがにもなり、読者の参考になることゝ思う。

普通一般にはあまり関心をもたれていないが、これ等は「埋もれかゝっているが生きた文化財」だと筆者は感じるようになった。刻み込まれている名前の人物は芦屋の歴史を語る中でなんらかの貢献があったに違いない。石造物のなかには建立年月日は勿論献納者の名前もないものが数多くある。石造物が雨や風のために年々いたんでいく、中には影も形も無くなってしまふのは実におしい事だ。道路の拡幅、新しい建造物が出来る等で、其の存在すらあやぶまれる時代である。

石造物の記録だけでは物足りなく、各項の解説を「遠賀郡誌」「芦屋町誌」其の他の書籍より、全文または一部を引用させて頂き、読者のより良き参考書になるよう心がけた。出来上って見たら石造物の調査記録よりも、他の書籍より引用した頁数の方がはるかに多く主客顛倒の形になってしまった。

この本は表題にもあるように筑前芦屋の旧跡めぐりをされる方への案内書です。神社・仏閣・地藏堂其の他古代遺跡・旧跡・名勝等を探訪される方への参考になれば幸いです。

芦屋町の南、粟屋より大城・浜口・芦屋・山鹿・柏原・田屋・正津^{ナリ}浜と出来るだけ無駄足をふまずに順序よく廻れるように記述した。

この書の解説文は要点のみを記述した。精しい事、専門的な事は「芦屋町誌」及び芦屋町郷土史研究会が毎年発行している「崗」を読まれることをおすゝめする。

終りに臨み本書編纂に際し、特に左の方々の御協力及び御教示を頂きました。(敬称略)

入江 義政	榎枝 昌介	岡部 章	小川健次郎	小田 政治	加藤 一男
加藤 勝	加藤 芳人	川崎 信雄	重岡 義博	柴田 正生	鈴木 長敏
瀬井 明生	瀬戸 正廣	田中 紅茅	田中 八郎	玉井 政雄	中西 市郎
長野 浩久	中山 司	能美 安男	野間 栄	波多野正敏	藤本春秋子
本郷 恭子	岬 茫洋	三好 利孝	三輪洋一郎	吉田 一芳	(アイウエオ順)

大竹孝次郎(祥雲)

紙上をかり、心より感謝と御礼を申し上げます。

蘆屋町沿革(遠賀郡誌)

蘆屋は筑前國中廣邑の一にして、又東郡中第一の廣邑也。故に古へより邊鄙には稀なる有名の所にて、人皇の初め神武天皇東征の時先づ此所に到り玉ひ、又仲哀天皇神功皇后も此所に行幸ましまし、ことは日本書紀に見えたり。安徳天皇も平家に具せられて此所を過ぎ、山鹿に行在ましましけることも平家物語等に記せる所なり。かく代々の帝の行幸ありし所は偏土には實に稀なるべし。山鹿も和名抄に載する所遠賀郡六郷の一にして、中古は山鹿庄と唱へ山鹿氏代々此所に居城しけるが、源平の乱に山鹿氏亡びて麻生氏代りて此に居て、本郡を領しければ頗る繁盛の里なりしが、今は合併して蘆屋に入れり。

此地上古より岡湊と称し著名なり。中古に至りて旅船の出入次第に頻繁となり、遠賀・鞍手・嘉摩・穂波及び豊前の田川郡よりも、米穀薪炭其他諸物品を持来り、又下関博多等の各港よりも入津する船舶の積み来る商品を交易し、或は其商品を此地に於て販賣し、これを四方に運搬輸送せり。

近古は船舶輻輳の地なりしを以て市場町には毎月市立ありて賑はへり。黒田長政筑前を領せらるゝに及び、非常に備へむが為め船を此地に繋ぎ舟を置かれし所今の船頭町なり。直方の領主黒田家よりは蔵所を山鹿村に置き、又船をも繋留せしめ江戸往來の用に充てられたり。(当時の船頭の士を岩崎・坂尾などといひ舟手の子孫今も猶存せり)

肥前伊万里の陶器は蘆屋山鹿の商人仕入れて上方に販賣しけるが、明治の初年迄は上方の人は筑前焼と唱へて、伊万里の産物なることを知らざる者多かりき。故に伊万里焼の商榷を墮断するに至れりと云う。又盛に生蠟を製造して上方に積み出すなどするを以て商業頗る盛なり。加ふるに文政年中藩より焼石會所を設置し吏員を派遣して、遠賀・鞍手・嘉摩・穂波四郡の石炭及び生蠟鶏卵をも此會所にて販賣することゝなりしかば、此等を運漕する船舶常に湊内に充満せり。其後東若松村に出張所を設け該村にても販賣することゝなり、蘆屋七歩若松三步の割合なりしが、夏時遠賀川河水旱涸して川艀船の上下頗る困難を感じるに際しては、若松へ送炭し難き為めに石炭積の船舶概ね本港に輻輳し、為めに両郷間渡船往來の不自由を感じるに至れり。右の如き有様なるが故に土地も彌増に繁盛なりしに、明治維新の初め焼石會所を廢し石炭の自由販賣を許さるゝことゝなり、若松は浚渫會社の計画も成りて日に月に旺盛に赴き、遂に今日の盛運を馴致するに至れり。於是乎、蘆屋湊の石炭販賣は歳月と共に減退すると同時に、旅船の出入は勿論繋船も稀少になりゆくに隨ひ、川内漸次に埋没して河身は彌増悪しくなりつゝ次第に衰頽して、昔の有様には比すべくもあらず。剩へ其後九州鉄道線路の布設に方り一考せざりしは、返すがえすも遺憾の至りなり。然れども明治六年には調所(今の郡役所)を設置せられ次で警察本署・収税部登記所・郵便局等の諸官衙も亦備り、且つ未だ他

に比類なき公立病院を設置して衛生の道を講じ、又岡南校を設立して高等小学程度の教育を施し、明治十三年には縣立蘆屋中学校の設立をさへ見るに至りしが、縣治の都合により同十八年廃校と成りしかば、其校舍を以て中学豫備程度の学則を設け涵泳校と改称せり。而して調所は郡役所と改称して尚郡治を掌りしに、同三十一年是又折尾村に移転する事となり。是より先若松港の発展に伴ひ、二十二年五月警察署は若松を以て本署と称することゝなれると同時に、蘆屋は遂に其分署となれるのみならず、税務署(取税部改称)も亦折尾村に移転することゝなり、官衙の現存するもの地方裁判所出張所(登記所)及郵便局のみにして、病院も亦町立と變ずるに至れり。廢藩置縣後一旦蘆屋山鹿を以て第一小区となし、扱所(今の役場)を山鹿に設けたるも程なく区劃の改正ありて、二十二年町村制実施の際までは蘆屋町・山鹿村各独立の町村なりしが、明治三十八年十一月五日合併して今の町村を編成し、世に知られたる名なればとて、蘆屋町と称することゝ成せり。然るに蘆屋は古へ山鹿の庄の内にてと古書にも見え、山鹿法輪寺古鐘の銘にも山鹿庄蘆屋津と刻せり、此鐘今はなし。又古き書に山鹿の金臺寺とあり麻生氏系図にも見ゆ。山鹿は田畑あれども充分ならず、蘆屋は特に少ければ両郷共専ら商賣川舟乘・漁業其他雜業を以て生計を営めり。

而して両郷を十八区八十九組合に分つ左の如し。

蘆屋十一区五十六組合	
第一区	東町 八組合 百十四戸
第二区	船頭町 八組合 百七十一戸
第三区	中ノ浜町 五組合 百戸
第四区	金屋町 五組合 七十四戸
第五区	中小路町 七組合 八十九戸
第六区	濱崎浦 五組合 百〇九戸
第七区	市場町 四組合 六十八戸
第八区	幸町 七組合 九十八戸
第九区	粟屋 二組合 二十四戸
第十区	大城 三組合 三十二戸
第十一区	濱口 二組合 三十四戸
山鹿七区三十三組合	
第一区	鴈木渡場 六組合 九十五戸
第二区	三軒屋 四組合 六十五戸
第三区	浦 五組合 五十一戸
第四区	本村守田後水万町大君 八組合 百四十二戸
第五区	柏原 六組合 百〇三戸
第六区	田屋 一組合 二十八戸
第七区	正津ヶ濱 三組合 八十戸

石明治四十三年十二月現在

茗屋編

13		12	◎	11	10		9	8	7		6	5	4	3	2	1	◎	◎	芦				
西	鶴	合	鶴	案	大	恵	月	月	大	阿	毘	徳	多	妙	庚	観	遠	地	貴	粟	案	芦	屋
川	松	戦	松	内	師	美	軒	軒	宝	弥	沙	満	間	見	申	音	賀	蔵	船	屋	内	屋	編
(新川)	の	丘	墓	図	堂	須	長	廃	院	陀	門	神	神	神	尊	堂	川	堂	神	排	図	町	目
碑	戦	苑	・	・	・	社	者	寺	・	堂	・	社	社	天	(粟屋)	(粟屋)	西	社	水	・	・	沿	次
・	没	・	・	・	・	・	(伝説)	趾	・	・	・	・	・	・	・	・	四	・	路	・	革	・	
・	武	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	国	・	新	・	・	・	
・	士	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	新	・	設	・	・	・	
・	合	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	西	・	・	・	・	・	
・	葬	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	国	・	・	・	・	・	
・	墓	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	と	・	・	・	・	・	
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	は	・	・	・	・	・	・	
二〇	二〇	一九	一九	一七	一六	一六	一五	一五	一五	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一三	一三	一三	一二	一二	三	三	

				23			22		◎	21	20	19	18	17	16	15			14			
力	稻	恵	天	蕪	岡	岡	ア	千	千	鹿	空	案	芦	安	猿	福	遠	遠	河	祇	繁	地
石	荷	比	満	子	湊	湊	ヤ	光	光	の	也	内	屋	長	田	岡	賀	賀	守	園	昌	蔵
(四横綱直筆)	社	須	神	小	神	神	メ	院	院	角	上	図	歌	寺	彦	法	川	川	神	橋	した	堂
・	天満	神	社	野	社	社	科	の	跡	の	人	・	舞	大	務	河	口	・	・	・	新	(新築)
・	社	社	・	賢	の	江	の	大	杖	蘇	立	の	伎	神	局	埠	堰	・	・	・	築	・
・	・	・	・	一	祇	戸	蘇	蘇	・	鉄	像	役	の	・	芦	・	・	・	・	・	・	(東町遊廓)
・	玉津島	・	・	郎	園	葛	鉄	・	・	・	と	者	・	・	屋	・	・	・	・	・	・	・
・	社	・	・	の	太	蒲	・	・	・	・	画	町	・	・	出	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	句	鼓	・	・	・	・	・	像	跡	・	・	張	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	碑	・	・	・	・	・	・	・	の	・	・	所	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	碑	・	・	(登記所)	跡	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
三二	三一	三一	三一	三〇	二七	二六	二六	二六	二五	二五	二三	二二	二二	二二	二二	二二	二一	二一	二一	二一	二〇	二〇

66	土器面祭祀跡	一三四
67	土器面窯跡	一三四
68	不動堂	一三四
69	徳満神社	一三四
70	徳満神社	一三四
71	徳満神社	一三五
72	徳満神社	一三五
73	徳満神社	一三六
74	徳満神社	一三六
75	善福寺(浄土宗)	一三六
76	河童縁起書(伝説)	一三六
77	生目八幡宮	一三七
78	山鹿鉾害復旧之碑	一三八
79	大師堂	一三八
	福岡県指定文化財一覧表	一三九
	芦屋町指定文化財一覧表	一三九
	芦屋の石造物一覧表	一四〇
	石造物の図解	一五八
	明治～大正初期の芦屋風景	一五九
	大正六～七年頃の芦屋風景	一六二
	大正末期～昭和初期の芦屋風景	一六四
	思い出の芦屋風景(木版画)	一六九

芦屋昔話	一七三
芦屋の方言	一七七
はねその唄	一八一
参考資料	一八八
あとがき	一八九

浜木綿(本文一三三頁参照)



1

粟屋排水路新設竣工記念碑 一 粟屋

大城バス停より徒歩十五分
粟屋バス停より徒歩 五分

(碑文)

粟屋排水路ハ、昔ヨリ北方国有松林内ノ低地ニ流水シテ居タガ、昭和十五年芦屋飛行場建設起工トナリ、国有林ヲ用地トシテ地均シ、工事ノ際排水路ハ埋没サレ、其後大降雨ノ時ハ粟屋区内凹地約四千坪ガ浸水シ、四々五個所ノ宅地モ浸水、町里道モ約六十程浸水セリ。此被害ヲ無クス為、安高團兵衛ハ町長泉知事ニ陳情シ、遂ニハ農林省大蔵省ニ陳情請願シテ此排水路新設工事ヲ施行、昭和三十四年四月二十四日竣工シタリ。排水路ハ内径八十程ノヒューム管ヲ二百十メートル埋設、工事費壹百七十六万円ハ国費支辨ノ申請、資料並ニ運搬費等ハ安高自辨、排水流水土地約二反歩余ハ安高團兵衛所有地ヲ無償利用セシメタリ。

昭和四十二年二月建碑 安高 團兵衛

※安高 團兵衛

粟屋に生まる。家業は農業。自給自足、労力の調整、日夜精励を信念とし、夏でもひる寝一つしなかつた篤農家である。時は金なりでなく、時は命なりといつて各種の念合にはすべて時間敵守を励行した。農業技術の改良普及、多角農業を奨励して、商業的農業の経営に努力した。人は感謝の心をもって生活の基礎とすべきであると説いていた。また公私各団体の役員に推され、数々の委嘱をうけて努力した。飛行場の設

2

貴船神社(山ノ口ノ神) 一 粟屋

置による、三里松原伐採にともなう防風林被害にたいする国の補償費問題、また畑地灌漑工事、粟屋排水路などの建設工事には、献身的な努力を惜しまなかつた。また日本陸軍飛行場建設の際、大城において昭和十八年十二月二十三日発掘された大塚古墳の保存、移築、復元に大いに尽力された。昭和四十二年三月十九日七十歳で没した。(芦屋町誌)

(徒歩四分)

◎職立石柱 一 明治三十一年(一八九八)九月

芦屋町粟屋区

◎鳥居(額・貴船神社) 一 昭和三年(一九二八)四月

◎社殿 一 昭和十三年(一九三八)改築

◎玉垣 一 昭和十三年(一九三八)本殿改築記念粟屋区中

3

地藏堂 一 粟屋(貴船神社の裏)

◎石段 一 明治十二年(一八七九)三月 本田 伊六 外

◎水盤 一 昭和七年(一九三二)七月 安高 福蔵

◎堂宇 一 遠賀 川西四国第七十九番札所

本尊 十一面観世音菩薩

◎大師祠 一

◎石祠(牛馬の神) 一 明治二十三年(一八九〇)九月建立

※遠賀川^{かわ}西四国・新西国

遠賀川西とは遠賀川下流の西方地域で、中間市・岡垣町・遠賀町・芦屋町の一市三町をその範囲とする。遠賀川西四国八十八ヶ所、新西国三十三ヶ所の霊場の開設は明治三十六年にして、芦屋町中西勘助外九名の発起である。

(徒歩六分)

4 観音堂 | 粟屋字原の上

◎堂 宇 |

遠賀 川西四国第七十八番札所
本尊 阿弥陀如来
遠賀 川西新西国第三十番札所
本尊 千手千眼観世音菩薩

(徒歩三分)

5 庚申尊 天 | 粟屋(粟屋バス停西側)

(判読不明)

(徒歩十四分)

6 妙見神社 | 大城^{おほしろ}

祭神 伊佐奈岐神

楠木正成公

往古より、大字芦屋一、二八二番地の老松繁茂せる聖地に、大城区の守護神として奉斎していたが、昭和五十二年五月現在地に新築移転す。多聞神社・貴船神社・徳満神社・毘沙門

堂は別々の所にあつたが、妙見神社に合祀す。

※多聞神社(里人は楠神社また楠公社とも云う)

祭神楠木正成公を字南ヶ浦に多聞神社と称して奉斎せるを明治四十四月妙見神社に合祀す。

南北朝持代、四條暁で戦死した楠木正行の孫が、この大城に来て十六代目まで住んでいたという記録がある。楠氏の子孫が来て築城したことから大城の地名があると、土地の古老は語っているが、築城のことははっきりしない。十六代目に芦屋から若松の脇田へ移住したという。脇田に転じた楠氏の子孫は現在脇田に住住し、また若松区畠田の禅宗禅覚寺住職楠博門もその後裔で、系図は禅覚寺にある。妙見神社に合祀されている楠公社では、毎年芦屋町先賢顕彰会が五月に楠公慰霊祭を行っている。(芦屋町誌)

※徳満神社

妙見神社に合祀される以前は字新屋敷にあつた。祭神は猿田彦命で、牛馬の神として農家が主になり祭事を行なつた。

※毘沙門堂

毘沙門さまといって小さな祠があつた。大城の祭神で田を植えおわるとナワシログゴモリといって、各家から思い思いのご馳走を持ちより大変に賑ぎあつた。

◎幟 立石 柱 | 明治二十年(二八八七)三月

芦屋郵社健中

◎鳥居 (額・妙見神社) | 昭和三年(一九二八)四月

◎水盤 | 昭和三年(一九二八)四月再建

◎石祠 | 再建 文久首載(一八六一)冬吉辰 芦屋村中

◎石祠 | 文政二年(一八一九)正月

笠に水の流れに二羽の鳥が遊泳している彫刻がある。

◎石燈籠 | 昭和五十四年(一九七九)三月

◎社殿 | 昭和五十二年(一九七七)五月再建

◎幣帛料の碑 | 昭和九年(一九三四)三月

建武中興六百年記念会

幣帛とは神に奉る物の総称で御供物のことである。幣帛料とは幣帛に代えて神前に供えるお金のこと、資格のある神社にそれぞれ国県市町村より使者がたち金一封がおくられる。(日本歴史大辞典)

◎庚申尊天 |

(徒歩二分)

7

阿弥陀堂 | 大城

阿弥陀堂・地藏堂・子安堂と別々の所にあつたが、現在地に阿弥陀堂を新築し合祀す。次にあげる板碑は旧阿弥陀堂の左前にあつたものである。

◎板碑 |

◎堂宇 |

遠賀 川西四国第八十番札所

本尊 阿弥陀如来

8

大寶院 |

遠賀 川西新西国第三十一番札所
本尊 十一面観世音菩薩

本堂入二間・横三間半・寺地六十坪・大城にあり東照山と号す。天台宗修験本山西京聖護院末にて、宗像郡池田村孔大寺山三十六坊の一なり。天正二年(一五七四)開祖玄廣創建せしが、翌三年此所に移しけるに、享和元年より弘化元年まで廃絶せしを、同二年勝禅と云う僧(出雲国神門郡常松村の人、聖護院の弟子)再興せりと云う。と(遠賀郡誌)にあるが今は無し。

(徒歩十八分)

9

月軒庵寺趾 | 浜口

以前から礎石が表土に転がり、また古い布目瓦が多く出土することなどから、庵寺趾ではないかといわれていた。昭和五十四年一月下旬から発掘調査を行なったところ、奈良時代前半から平安時代にかけての瓦が多く出土したが、堂宇・遺構の検出ができず、庵寺趾と断定するまでには至らなかつた。この発掘調査では弥生後期のもので思われる住居趾が発見された。また弥生時代の壺やかめのかげら・砥石などが出土した。(広報あしや)

※月軒長者(伝説)

芦屋町のはづれ浜口地区に、「つきのき」という字名が現在で

もある。此所に昔朝日長者又月軒長者とも呼ばれる筑紫路きつての大金持がいて、一人娘と暮らしていた。長者はその娘の他に頼る者もなかつたので、大変に可愛がつていた。ところがその娘はふとしたことから眼病にかゝり、あらゆる手だてをつくしたが、ついに失明してしまつた。長者と娘は悲しみに打ちひしがれたが、この上は神仏の加護に拠る外はないと、娘は近くの薬師山堂塔寺に願をかけ、雨の日も嵐の日も一日も欠がさず祈つたところ「寺内に湧きいずる井戸の水で目を洗え」とのお告があつたのでその通りにしたところ、ある朝とつぜん目が見えるようになった。靈驗のありがたさに娘は発心して仏弟子になり、父娘とも再び楽しい日々が続いていたが、どうしたわけか娘はとつぜん目を洗っていた井戸に身を投げて死んだ。娘の死は未だに謎である。これが古くからの言い伝えであるが、月軒長者が何者であつたかわからない。(芦屋町誌・芦屋ガイドブック)

※薬師山堂塔寺

本尊は薬師如来。永録年中大友宗麟の兵火により廃絶した。伝説月軒長者の話にある古井戸は、現在も「目洗いの井戸」と言い伝えられている。寺跡は今荒廃しているが、時折巴瓦や古瓦の片々が発掘される。(芦屋の葉)
薬師山堂塔寺は遠賀町若松に位置し芦屋うちではないが特に記す。

(徒歩十分)

10

惠美須神社 | 浜口 七一四

祭神 事代主神

◎鳥居 (額・惠美須宮) | 明治二十八年(一八九五)九月

大庭 寿壮 福原 卯助

◎敷石 | 明治二十八年(一八九五)十一月 柴田 常吉

◎水盤 | 明治二十八年(一八九五)九月

大庭 寿壮 福原 卯助

◎社殿 | 嘉永三年(一八五〇)四月再建

大正十一年(一九二二)二月再建

(社殿の中奥に)

◎石祠 (惠比須坐像) | 嘉永三年(一八五〇)四月再建

◎猿田彦大神 | 寛政二年(一七九〇)晩冬

この猿田彦大神は以前浜口の南入口に祭つてあつた。

(惠美須神社の裏側)

11

大師堂 | 浜口 七一五

この大師堂は俗称アリラン峠の近くにあつたのだが、芦屋鉄道ができるとき此所に移された。

◎門柱 | 大正九年(一九二〇)八月 福原 卯助

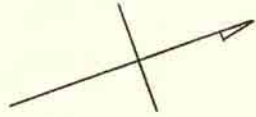
◎南無阿弥陀佛 (供養塔) | 慶応四年(一八六八)三月納経

保正 森 正平

同妻

以前は芦屋町浄水場の近くにあつた。

自衛隊芦屋基地



正門町

船頭町

福岡法務局芦屋出張所(登記所)跡の碑

緑ヶ丘

高浜町

芦屋浄水場

カーブミラー

浜口町

新川

河守神社

祇園

月新庵寺跡

大節堂
恵美奈神社

鶴松の碑
鶴松丘戦没武士合葬

鹿屋山寺跡

地蔵堂

◎弘 法 大 師 (台石のみ) | 明治二十年(二八八七)六月

大庭 寿三 江藤 助七

弘法大師(坐像)は本堂の中に安置してある。

◎本 堂 | 大正十三年(一九二四)八月建築

遠賀 川西四国第一番札所

本尊 釈迦如来

遠賀 川西新西国第三十三番札所

本尊 十一面観世音菩薩

◎仏 像 (本堂の周圍に一〇二体) | 明治二十一年(二八八八)

明治二十年七月に大庭寿三といえる老翁 主となり有志に

はかりて、八十八ヶ所にちなみ八十八体の仏像と高野十三

仏を刻む。

(徒歩十分)

12

鶴 松 墓 苑 | 浜口町六一四七

鶴松墓苑(鶴松墓地又は浜口墓地ともいわれる)は戦時中の昭和十五年に開設された軍の飛行場敷地内にあった共同墓地の総引越先である。終戦後町の区劃整理などにより、禪壽寺墓地や安養寺墓地のものも移され、また東町の芦屋役者の墓百二十基余もこゝに移された。今ではこの松原の中に五、六百基ばかりの墓碑が散在している。

「鶴松」とはこの松原の中に、あたかも一羽の鶴が羽を一杯にひろげた形の松がある。名松「鶴松」とたゞえられ戦前に何回か発行された芦屋名所絵葉書には必ずおさめられていた。主幹の

高さは僅かに六〇糎余であるが、根まわりは一、九〇糎もあり六本の枝が四方に延び、そのほとんどが砂地をはって翼を形成し、みごとなものである。戦前は鶴の首にあたる枝がほどよい高さのびていたが、惜しいかな今はその首枝はなくなっている。(芦屋町誌)

◎合 戦 丘 戦 没 武 士 合 葬 墓 |

昭和三十三年(一九五八)三月建之 芦屋町

(碑 文)

元暦二年(一一八五)二月一日豊後北條下川辺等芦屋浦に先登す。太宰少弐の子嘉麻兵エ等之と戦ひし処を合戦と称ふ。中ノ浜、船頭町の上白沙青松の丘にして、戦没五武士の墓ありけるを何者かに持ち去られ、黒山町長及町民甚だ遺憾と為すこと久し。然るに町の発展に伴ひ丘を小公園にしつらえるため七百五十余年後の今日更めて塔を建て此地に改葬合祀せり。欣喜に堪えざるなり。諸霊夫れ当局の此行を受け詭経回向を耳にせば、速かに彼岸に登り極楽浄土に成仏せよ。

(崗六号田中八郎)

※今は平坦地になっているが、以前芦屋中学校南方一帯に高さ二五メートルばかりの砂丘があった。文治元年(一一八五)のころ屋島の戦がはじまる前、源頼朝軍の北條小四郎・下河辺行平らが奮戦して原田種直軍をやぶり、豊後に源氏軍の拠点をつくることに成功した。芦屋で両軍が戦った所は合戦ヶ原と呼ばれる。永禄十一年(二五六八)には長州の毛利と豊後の大友とがこの合戦ヶ原で戦ったという。

西川（新川）

※合戦丘戦没武士合葬墓は以前中央公園の砂丘の上に建てられていたのだが、砂丘をけつって平坦地にしたとき、鶴松墓苑に移された。（芦屋町誌）

◎鶴松の碑 — 昭和五十六年三月
（碑文）

この松は首を伸ばし両翼をひろげ、今にも飛び立とうとしている姿が、いかにも美しいのでこの名が生まれた。両翼の長さ一〇メートル首の高さ二メートル幹の周り一、九メートルで樹令は三百年以上と推定されている。惜しいかな昭和二十年ころ首の部分が折れたので、新しい枝が育てられた。古くから芦屋の名勝の一つに数えられている。

※当鶴松墓苑には吐香林田頼威の墓・梅窓庵吐香の墓・太田氏一族の墓、近世に至りては大統社工業塾を創立した吉田三郎の墓がある。

南島門村大字若松島津両区の界より流れ来り、芦屋区の東にて遠賀川に落ちひ海に入る。其長さ九百四十四間余あり。

東町の東に新川あり、是れは文化五年（一八〇八）初めて堀れり、其故は遠賀川洪水のとき島門村大字若松鬼津両区の田島水に浸りて、数日干ることなし、因て此川を堀り西川の水を分ち直ちに芦屋の海に達せしめんが為なり。其長さ三百六十五間なり。（遠賀郡誌）

地藏堂 — (旧東町) 高浜町一—一二

(鶴松墓苑より徒歩十四分)

里人は新築のお地藏様という。昔時新築には数軒の遊郭があった。郭の女達が嬉しい時また悲しい時にお願いごとをし、信仰していたお地藏様である。以前は新川（西川）の方に向いていて、前に広場もありお祭りのときにはは出店も数多く出て賑あった。

◎堂宇 —

遠賀川西四国奥の院
本尊 地藏菩薩

※繁昌した新築（東町遊郭）

明治二十四年に遊郭取締県令が施行された。当時の遠賀郡に遊郭の許されていたのは、若松の連歌町と芦屋の新築（東町）の二ヶ所しかなかった。それがためこゝは特別の歓楽境で賑を極めていた。その証拠には請願巡査の駐在所が設けられていた。遊廓（貸座敷）は三藤楼・梅月楼・恵比須楼・旭楼と軒をならべ、一寸離れて自由亭（後に雁楼）の五軒があつてそれぞれ多数の芸妓や娼妓をかゝえ、それを一杯飲屋などがとりまいていた。遊廓設置前には町内各所で遊廓類似の営業が行われていたが、風紀取締りのため一区画に制限されたものであり、当時金屋町には遊鶴亭・三鼎楼其の他の料亭があり又芸妓券番もあった。石炭関係の業者や川船や胴船の船頭さん相手の石炭景気で、花柳界は盛んなものであったことが想像される。（崗二号桜枝卯七）

※この新築の遊廓街は新築のお地藏様の北側の通りである。終戦直後それらしい家が残っていたのだが今は無い。

15

祇園橋

昭和二十八年六月二十九日の豪雨により、新築のお地藏様東方の新川は祇園橋にかけて堤防決壊し、民家も数軒流失した。このとき祇園橋も共に流された。当時の祇園橋は橋脚が花崗岩の石柱で欄干は木製であったが、流出後はコンクリート製にかわった。欄干本柱には昭和十六年八月とある。

(新築のお地藏様より徒歩八分)

16

河守神社

祇園崎にあり、ブロックで囲んだ小さな祠が二つ並んでいる。※祇園崎は島であったという。明治四十二年の遠賀川改修工事の際遠賀川堤防とするため島津方面と陸つづきになった。筆者が子供のころにはこゝ祇園崎に瓦製造業者が五、六軒あって、瓦を焼く窯が数基ありまた型より取り出した生の瓦を乾燥させる瓦葺の細長い小屋が数多くあった。

17

遠賀川

遠賀川は穂波川・嘉麻川・彦山川などをあつめて、川口の芦屋まで全長六四キロ、遠賀・鞍手・嘉麻・穂波・田川の五郡をゆるやかに流れて、流域平野をうるおすだけでなく、古代

18

遠賀川河口堰

中世から水上交通路として重要な役割をはたしてきた。源を鞍手郡大鳴山・嘉穂郡馬見岳・豊前英彦山などに発している。遠賀川流域にて産出する貢米を平駄にて水上輸送していた。平駄とは船底を平たく浅く造った船で「浅舟」ともいわれていた。福岡城築城のときまた江戸城・大阪城工事に藩から建築材料を積み出すときなど、藩の御用として遠賀川を上下したから「御平太」ともいわれた。昔は遠賀・鞍手・嘉麻・穂波四郡で産出する貢米を輸送していたが、明治にはいってからは筑豊炭田に産する石炭を川舩によつて輸送した。其の他玄米・石灰石・生蠟・木材などを積んで、この遠賀川を下っていた。しかしこの川はひとたび氾濫すれば、流域が広いだけに田畠に大損害をあたえ、人畜に被害をおよぼした。遠賀川で主な輸送機関である川舩も流失したり損壊された。芦屋地区で遠賀川改修工事が始つたのは明治四十二年五月で工事は終了は大正五年三月である。旧遠賀川は川幅の広い所や狭い所があつたので、狭い所は改修工事用地として買取して川幅を広げた。芦屋の祇園崎が半分以上及び山鹿の雁木・渡場・浦も大半が河川敷地となった。勿論川底は深く浚渫された。(芦屋町誌)

この河口堰は響灘よりの海水を遮断し、遠賀川上流より流れて来る水のみを溜め、飲料用の水道用水確保及び工業用水確

保の目的で造られたものである。遠賀川上流に大雨が降った時、河口堰にある可動堰は自動的に上り堰にたまつた水は流れ出るようになってゐる。水は河口堰より中間市まで九キロの間にたまり有効貯水量は八四万トンである。堰の長さは五・七メートルであるが、上の通路は五・二一、六メートルで幅員五メートルの巨大なものである。

(徒歩七分)

福岡法務局 蘆屋出張所(登記所)跡の碑

(旧東町) 船頭町一三一五

明治十八年登記法が発布され、同十九年遠賀郡役場内(幸町)で事務取扱いをしていたが、同二十一年十一月小倉区治安裁判所(後に区裁判所)芦屋出張所と改称、同二十五年芦屋町が幸町に新築して献納した建物に移つた。同四十年五月火災のため焼失し、同四十二年三月幸町の民家を借りあげて業務をつづけた。大正十五年五月三十日こゝ東町に移転した。昭和二十二年五月福岡司法事務局芦屋出張所と変更、同二十四年六月福岡法務局芦屋出張所と称した。同二十九年四月芦屋町において庁舎を補修した(経費二二万九千四百円)。同三十九年五月十一日水巻頃末に移転した。(芦屋町誌)

(徒歩二分)

猿田彦太神一(旧東町) 船頭町一〇一九

(大銀杏の木の下) 寛政十一年(一七九九)七月

21

安長寺一(旧東町) 船頭町一〇一八

西方山極楽院と号す。即ち空也堂にて、浄土宗光明寺の庵室たりとあるがもともとは時宗であつた。開基年号は明らかでない。空也上人が来てのちに浄土宗に改宗したものらしい。記録によれば元禄元年(一六八八)には空也堂安長寺として再建した。其の後どのような経緯からか再び時宗へ改宗している。(芦屋町誌)

この東側一帯の町を以前は寺中町じうちゆうまちと言われていて、芦屋歌舞伎の役者たちが住む役者町であつた。安長寺はこれら芦屋役者を壇徒としていた寺であるが、芦屋役者の離散もあつて今では史跡の様相を濃くしている。(芦屋ガイドブック)

◎芦屋歌舞伎の役者町跡の碑一
(碑文)

平安時代諸国遍歴の空也上人に従つて当地に來た供人達を祖先とする念仏衆の人々は、慶長十年(一六〇五)藩主の御茶屋跡であつた此の附近の地を賜わり寺中町を形成し、いづつか歌舞伎を手がけ各地を巡業し、芦屋役者の名声を博したが、明治の末期に廃絶した。当安長寺は初め空也堂として、役者町の人達が建立したものである。

◎惣門(屋根門)一

左右に御堂を従がえた珍しい造りである。左右に安置されたお地藏様が向い合つてゐるので、里人は「向い合いの



自衛隊 芦屋基地

正門町

白浜町

幸町

高浜町

船頭町

西浜町

緑ヶ丘

響灘

神武天皇社跡

山田有成功表石

芦屋小学校

浜の地藏堂

岩津神社

白浜神社

地藏神社

芭蕉句碑

旧芦屋尋常高等小学校校門石柱

耕地整理頭影碑

大國社跡

大塚古墳

芦屋高等小学校跡

県立芦屋中学校跡

石室

芦屋尋常小学校跡の碑

中町民体育館

地蔵堂

長野政八翁

歴史民俗資料館

宗祇の句碑

川端

海雲寺

宝篋印塔

安養寺

麻生氏の墓群

金台寺

子安地藏

火切地藏堂

日蓮宗

芦屋教会所

筑前芦屋宿場

構口の跡

観音寺

大國座跡

遠賀郡役所跡

横町の地藏堂

立地藏

炎火神社

閻魔堂

恵比寿神社

光明寺

戎神社

芦屋警察署跡

横ノ丁地藏堂

猪春大明神

速瀬神社

北九州市営自衛隊前バス停

中央公園

芭蕉翁墓

石蘭の句碑

五重層塔

禪寿寺

志賀神社

岡湊神社

安長寺

千光院跡

千光院の大蘇鉄

舞伎の役者町跡の碑

豊田彦太神

福岡法務局出張所跡の碑

旧芦屋橋

筑前芦屋釜造跡

入江徳郎氏の生家

垂間野橋の跡

福岡藩炭石会所跡

今に残る商家

トモ綱石

浜崎浦の石波止

お地藏様一とっている。

◎墓 石 | 当山再興上人

桂光院其阿照全老和尚

昭和五十年三月廿日寂

神田照全 八十六才

◎南無善女龍王の碑 |

◎地藏 像 | 元禄六年(一六九三)七月 日高 四郎

◎大 乘 妙 典 一 字 一 石 之 塔 |

寛政十年(一七九八)二月

◎墓 石 | 嘉永三年(一八五〇)三月十八日

當寺中興開山善翁篤巖大和尚禪□

事蹟は全く不明であるが、無住時代の多かつた安長寺に、幕末のころ住持として腰をすえ、安長寺の復興に尽した僧のようである。(芦屋町誌)

◎水 盤 |

◎本 堂 |

遠賀 川西四国第八十七番札所

本尊 聖観世音菩薩

◎扁 額 | 空也堂

◎空 也 上 人 の 立 像 (県指定有形民俗文化財)

木造で自作と伝えられ空也堂の本尊である。

◎空 也 上 人 の 画 像 |

空也は京都の人だが姓氏は明らかではない。醍醐天皇の皇子とも常康親王の子だともいう。延喜三年(九〇三)の生れ

である。二十一歳のころ尾張国分寺で出家して空也と称し、国内をまわって道路修理・架橋・廃寺再興・死体埋葬また井泉を掘るなど慈善救済事業につとめた。京都で市聖と呼ばれながら念仏教化をつづけ、絡東に一寺を建てた。六波羅密寺(西光寺)である。天禄三年(九七二)こゝで没した。

空也は天慶年間(九三八〜九四六)供人十八名をつれて芦屋に來たと言ひ伝えられている。(芦屋町誌)

空也上人は毎日辻々に立ち、鰐口を敲きながら、腰には瓢箪をぶらさげて、手振り模様もおもしろおかしく念仏踊りをやつては、善男善女を集めて仏教のおしえをといていた。ところが或る日のこと、空也上人は突然十八名の供人を置きざりにしたまゝ、薄情にも京都に帰えってしまった。立ちどころに困つたのは十八名の若で、明日からの生活もどうしてよいか判らなかつた。思案に暮れた結果、見馴れ聞き覚えた空也上人の念仏踊りを真似ながら、辛くもその日その日の生活を凌ぐことになつたのが、そもその芦屋役者の起りである。

この附人たちの子孫が江戸時代になって歌舞伎を手がけ、有名な芦屋役者になつたのである。明治中期ごろまでは盛んで津々浦々を巡業し、かたわら若者たちに歌舞伎や踊りの手ほどきなどをして、村芝居の興隆にも大いに貢献したが明治末期には廃絶した。(芦屋の葉)

◎鹿 の 角 の 杖 |

鹿角杖は空也僧のシンボルだった。空也と鹿角杖については平定盛との話がある。空也の庵室近くに遊びに来ていた鹿を

平定盛が射殺した。空也はあわれんで其の皮と角をもらい
うけ、皮は褌かむろにして身につけ、角は杖頭にさして遺愛のも
のにしたという。(芦屋町誌)

- ◎守札版木及び写したもの
- ◎芦屋役者たちの過去帳
- ◎安長寺由緒書

千光院跡 | (旧東町) 船頭町一―二〇

千光院は岡湊神社宮司の坊なり。鶴林山千光院祇園寺と号す。
高倉の真言宗神傳院の末なり。今は共に廃寺となれり。院内
に大師堂・大日堂・弁財社・鐘楼・其他工作物が有りしが、
明治の初年神仏混淆を禁ぜらるゝにあたり、大師堂・八十八
ヶ所の仏像及び五重の塔は禅寿寺に大日堂は海雲寺に、弁財
天は寄附者の子孫にそれぞれ移された。(遠賀郡誌)
千光院は現在岡湊神社宮司林田氏の居宅になつてゐる。

◎千光院の大蘇鉄(県指定天然記念物)

この蘇鉄は寛永十四年(一六三七)天草四郎時貞が島原に乱
を起した折、老中松平信綱は將軍の命を受け、板倉・鍋島・
細川・黒田藩らの十二万四千余の兵により鎮定した。特に
黒田藩の奮戦により原城の本丸が落ちたので、黒田藩の將
兵は帰藩の折、原城内にあつた蘇鉄を船に積んで持ち帰え
り、出陣のとき戦勝祈願をした所である岡湊神社の境内に
植えたと伝えられる。その後延宝年間こゝに千光院が建立

された。この蘇鉄は幹の周囲三・六メートル高さ三・七メ
ートル枝数四十本余雌樹で多数の実を生じ、豊後日出ひでの松
屋寺やじ及び泉州堺の妙国寺の蘇鉄とならんで、我が国三大蘇
鉄ともいわれたことがある。はるばる海を渡つて来て三百
四十年余の歳月をすぎた今日なお、依然として衰えを見せ
ず苔むした巨体は、益々その威を加えてそこはかたなく移
りゆく世をながめてゐる。

昭和三十二年六月、島原市待島神社入江宮司・同神社総代
満井貫一の両氏が千光院に来訪され、この蘇鉄の分譲を請
われたので、早速有志とはかつて「蘇鉄の里帰り式」を行
い数株を島原に送つた。其の一つは原城にも移植してある。

(芦屋の葉)

◎アヤメ科の江戸菖蒲

岡湊神社の宮司林田守邦さんが十数年前、東京の明治神宮
から株を分けてもらい育てゝいるもので、竜の手の格好を
した珍種「竜の爪」や、卵形の花を咲かせる「玉宝蓮」な
ど、六十種におよぶ百四十鉢が紫・黄・白と清楚な花が美
を競いあつて、訪れる人の目を楽しませてくれる。九州に
多い大輪で豪華な「肥後菖蒲」とは異なり、小柄で上品な美
くしさが特色であり、六月中旬頃が見ごろである。

(西日本新聞)

岡湊神社 | (旧船頭町) 船頭町一―二四八

祭 神 大倉主神 菟夫羅媛神
相 殿 素盞鳴尊 天照皇大神

仮鎮座 神武天皇社祭神(神武天皇社の社殿焼失により)

中古は岡垣町の高倉神社の下宮なりしが、今は分離して独立の宮となれり。芦屋町の産神なり。素盞鳴尊を祭るはいつのころにや不詳。素盞鳴尊を合祀せしより、里人は単に祇園社と称し来れり。古は大城の東北入海にさし出たる岡の上(浜口)の南月軒その址なりと云う。今は畑となれり。礎石古瓦等往々掘り出せり。これは其の後月軒長者と云える者の住みし由なれば、或はその礎石古瓦にはあらざるか)にありしを、いつの頃にか今の地に移せるなり。

御社はいかめしく、神領も数多所ありて、祭礼も繁かりし由なりしが、足利氏の衰乱に社領もやゝ押領せられ、天正十四年(一五八六)薩摩の軍勢此の辺を乱暴せし時、此の社も兵火に罹りて焼失せしかば、神殿神宝皆烏有となれり。其後再興ありしかども昔には似るべくもあらず。豊臣秀吉九州に下られし時、神田さえ残りなく没取せられしかば、祭礼の式も昔の十分の一にも及ばず。寛治の頃までは旧六月十五日に猿楽の能を奏しけるが、兵乱の災によりて能の諸具も焼け亡び或は散逸しける。然るに或時、里老数人の夢に神の告げさせ玉いけるは「近日本社の宝物を持来る者あらん、必ず買い取るべし」と覚めて後人々怪みおもいはべる折しも、一人の山伏能の假面一つ持来りしかば、夢みし人々是なむ、神の告げ玉

いし所なりとて各相悦びて買取りけるに、彼の山伏又その明年三番叟の假面一つ持来りけるより是をも買取りぬ。俗人々彼の山伏の異相なるを怪しみ人を附けて見送らしめけるに、数十歩にして其の姿を見失いたりと。其の後復た兵火に罹りしに、假面を納れし箱の内頗りに鈴の音しけるを、社司の輩やがて取出し火を避けて持ち出でける。此の二面の假面及び鈴一握、本社第一の神宝として今猶神廟に秘めおかれる。

(遠賀郡誌)

※岡 湊 神 社 の 縁 起 書 一

養生訓で有名な福岡藩の医学者貞原益軒が、正徳元年(一七一)に書いたもので上下二巻からなっている。

※岡 湊 神 社 の 祇園太鼓(町指定無形民俗文化財)

祇園太鼓の由来は天草四郎の島原の乱で、幕府軍の一翼をになつた黒田藩が、隊士の志気を高めるために軍鼓・陣鐘を用いたことに始まり、凱旋のときにこの軍鼓・陣鐘を出陣港であつた芦屋に持ち帰えつて、芦屋勤番の黒田藩士が戦場に使つたそのまゝを祇園山笠の鐘・太鼓に持ち込んだものと言ひ伝えられている。(芦屋ガイドブック)

※千 光 院 寺 中 町 関 係 資 料

(県指定有形民俗文化財)

岡湊神社の所有で、慶長十年(一六〇五)以降明治四年までの神仏混淆時代の古文書で、その中には特に芦屋歌舞伎研究解明の上に貴重な資料である。(芦屋町誌)

◎鳥居 | 明治二十七年(一八九四)十二月

桑原 傳次郎宗雄

◎百度石 | 天保四年(一八三三)六月

海上安全 若松屋 善九郎 若松屋 吉平

同 藤十郎 同 熊石工門

同 和平 同 治吉

東屋 伊八

◎狛犬 | 嘉永六年(一八五三)正月

海陸安全 錢屋 源次 蛭子屋 儀助

紀伊国屋藤右衛門 米屋 源右衛門

山本屋 孫七

◎千七百年祭の碑 | 明治三十五年(一九〇二)秋

世話人 長野 新三郎 永田 喜十郎

中西 勘助 永嶋 幸太郎

◎狛犬 | 寛政十二年(一八〇〇)五月

周州上関室津 石工 和泉屋 八兵衛

(左) 冲船頭 刀根貞五郎乗組中

当浦 掛屋 天満丸

施主 越野 三郎平

(右) 当浦 掛屋 観音丸

施主 中西 次郎兵衛

冲船頭 松田平九郎乗組中

◎幟立石柱 | 昭和十三年(一九三八)

◎石燈籠(式日献燈) | 天保三年(一八三二)九月

(左) (芦屋陶器商人)

米屋 定右工門 塩屋 与平 植木屋 善藏

萬屋 武平 関屋 清次郎 太田 喜平太

吉野屋 七作 米屋 新次郎 田中屋 伝三郎

俵屋 茂七 関屋 助次郎 綿屋 甚右衛門

蛭子屋 儀助 萬屋 吉右工門 慶徳丸 徳七

祇園丸 助七 弁天丸 兵助

◎石燈籠(式日献燈) | 天保十年(一八三九)八月

(右) 肥前伊万里寄附連名 石丸 源左右門 横尾 武右門 前川 善左右門

水町 政右門 末石 松太郎 松尾 彦兵衛

古沢 喜兵衛 田中 米次郎 古沢 平右門

福島 壽兵衛 横尾 勘兵衛 本岡 城太郎

瀬戸口 仙十 藤野 長右門 井上 鶴吉

古沢 梅五郎 江頭 吉次郎 山田 常太郎

横尾 惣吉 岡田 卯左右門 前田 治三郎

水町 治三郎 浦郷 忠兵衛 吉田 兵助

天ヶ瀬 慶十 上瀧 益太郎 田丸 嘉兵衛

平松 兵吉 岩永 平左右門 福地 徳次郎

山口 菊次郎 森永 作右門 吉村 七郎兵衛

梅崎 利右門 武富 善助 浦郷 喜右門

前川	善兵衛	中尾	長石門	大塚	直太郎
西	儀三郎	西	忠次郎		
馬場	伝右門	高庄	氏登与	古沢	卯之助
前田	政十	松尾	幸吉	東	松之助
岩本	佐兵衛	立石	岩次郎	大田尾	卯右門
武富	七太郎	田中	兵治	城島	利右門
西	儀右衛門	村富	光石門	岡田	卯之助
川浪	兵助	天瀬	庄吉	田丸	常三郎
岡田	新十	浦郷	政右門	天瀬	太兵衛
松本	幸右門				
松尾	熊助	立石	辰十	本岡	市左右門
大塚	伊左右門	福地	弥兵衛	石丸	鹿太郎
岩本	清吉	石丸	近次郎	岩永	仁太夫
川浪	庄石門				
当町保正		江頭	與四郎	濱口屋	庄五郎
世話人		塩屋	七石門	掛屋	清次郎
角屋	貞平	関屋	茂七	糍屋	清五郎
若松屋	藤十郎				

以上二基の石燈籠に見るように芦屋陶器商人と伊万里陶器商人との関係は深かった。芦屋陶器商人は伊万里焼を仕入れに

伊万里まで出向き商談がまとまるまでは定宿に泊まっていた。仕入れた伊万里焼を遠く上方まで売りさばきに行っていた。遠く越後地方まで足をのばす事も度々であったと言う。このように遠くまで商に出向くのを旅行たびりという。(芦屋町誌) 筆者の祖先が書き残したるものに次のように書いてある。

肥前伊万里焼陶磁器ヲ船積ミシ、自身ハ陸行大阪ヨリ信濃路ヲ経テ越後地方ニ行商セリ。当時冬期信越線地方大雪ノ困難ヲ新聞紙上ニテ承知ス。昔時交通不便及運搬困難尚盜賊徘徊スル時節、其ノ困難察スルニ難クハナイ。

初代勘市弟五三郎一寛政九年(一七九七)七月十八日信濃国飯山ニ於テ病死。信濃国飯山ハ信越街道(柏原)附近。(備考、肥前伊万里物産陶器行商ノ途次病死セシモノト思ウ)

二代目勘七一世襲商ニテ美濃地方行商、家産ヲ富シタルヲ以ツテ屋号ヲ美濃屋ト称セリ。

四代目勘七一東京へ行商ノ節ハ江戸深川区松屋清左エ門ヲ定宿トシテイタ。

ちなみに筆者の祖先を尋ねれば、筆者は四歳のときに養子に來たが、実父柴田元吉(勘助)は四代目美濃屋勘七の三男である。長男柴田清七(寅之助)は下の美濃屋柴田清三郎の養子となる。四代目勘七は下の美濃屋の長男に生まれたが本家美濃家の養子となり本家の家業を嗣いでいる。柴田清七は養屋如心と号し俳諧の宗匠をしていた。その父清三郎も若青と号して句を作っていた。柴田清七は家業にも勢を出し大阪

塚の住吉神社(反橋を渡って右側)に高さ五尺余りの伊万里焼燈籠(金網張り)を献納してあった。現在はその位置には無く宝物殿の中に保管されている由。

岡湊神社の旧石玉垣(後の項に記す)を見るに、美濃屋と刻み込んであるものが数個ある。美濃屋勘七は美濃屋二代目で美濃屋清三郎はその弟で下の美濃屋の初代である。

◎鳥居(岡湊宮)――

額面に岡湊宮とあるのみにして、寄進者名及製作年月日は刻んでないが、「遠賀郡誌」によれば元禄年中(一六八八)一七〇四)長野太郎左衛門重利寄附とある。

◎羊像――昭和六年(一九三一) 明治四庚未年生還曆記念

◎燕子・小野賢一郎の句碑――

昭和十年(一九三五)八月 鶏頭陣社門人一同

浪音より松籟高き二月かな 燕子

この句碑ははじめ芦屋浜崎海岸に建立されていたのだが、いつの頃にかこゝに移設された。

◎水盤――昭和十四年(一九三九)七月

明治十二巳卯年生還曆記念

◎水盤(社務所玄関前)――延宝八年(一六八〇)四月

太田 喜兵衛□□

◎潮井石――(左) 昭和十四年(一九三九)元旦

(右) 昭和十二年(一九三七)十一月

◎筑前芦屋釜讚像――

昭和五十年(一九七五)三月還曆記念

◎社殿――

記録によれば正保二年(一六四五)再建、正徳二年(一七二二)六月神殿再建、宝暦九年(一七五九)十一月拜殿再建、文化五年(一八〇八)十一月次再建されど其のあいだにも社領が押領せられたり神田が没収せられたり、再興したといつても昔には似るべくもなく、何時の頃からか今の地に移された。昭和四年(一九一九)二月の大火に焼失し、現在の神殿は昭和十一年(一九三六)十月の再建である。(芦屋町誌)

◎植樹玉垣――天保七歳(一八三六)正月

中西 善藏 稻屋 助七 和田 武平

◎石燈籠――天保二年(一八三一)十一月

(東側裏入口) 中西 善右衛門 村田 勝十

◎御輿庫――

明治三十四年(一九〇二)正月

吉永 幸右衛門 安高 徳兵衛

◎石燈籠(常夜燈)――弘化四年(一八四七)六月

(判読できるもののみ)

□□屋 彦次郎 米屋 清右エ門 蛭子屋 平四郎

丸尾屋 源次郎 福田屋 □□□ 三田尻船頭中

角屋 □□□ 丸尾屋 藤吉 舛屋 □助

吉野屋 嘉藏 万屋 徳兵衛 遠賀川船頭中

銭屋 源次 稻屋 助七

世話人 湊屋 次七 藤嶋屋 九十郎

金舛屋 又次 炭屋 □助 塩屋 喜右エ門

萬屋 平六 田中屋 傳三郎 紀伊国屋藤石工門
 塩屋 與平 美野屋 清三郎 萬屋 只平
 俵屋 茂七 太田屋弥石工門 関屋 彦兵衛
 米屋 甚五郎 〇屋 源五郎 萬屋 徳石工門
 米屋 源石工門 山鹿屋 文十

◎天満神社 菅原道真公

以前は金屋町にあり、社地も三百余坪あり、神殿・渡殿・拜殿もあつたが、明治三十四年芦屋高等小学校の運動場拡張のとき、旧海雲寺境内よりこゝに移設された。

※菅原道真公が太宰府への道すがら、芦屋を通つたとき腰をおろした松があつたが、いつの時代にか焼けて株だけが残されていた。それで御身体を彫んで祭つたのだという。

(芦屋町誌)

◎烏居(天満宮) 昭和三年(一九二八)陽月

金屋区飛梅講社中 江島 徳太郎 小川 松次郎
 吉永 千太郎 吉永 信一 吉永 幸助
 中西 徳一郎 花田 梅吉 永野 万三郎
 太田 卯之助 刀根 午吉 秦 幾次郎
 徳永 幾次郎

◎潮井石 嘉永三年(二八五〇)正月

銭屋 源次 米屋 源石衛門

◎石祠(天満神社) 一

◎恵比須神社(金屋町より移設) 一

石祠 一 天保四年(一八三三)九月再建
 林 貞蔵 焚石問屋中

◎稻荷神社・天満神社・玉津島神社

昔の町名で寺中町(旧東町)には、芦屋歌舞伎役者達が守護神として崇敬し、古くから祭祀をつづけてきた稻荷宮・天満宮・王女神の三社があつた。稻荷宮と天満宮は遠賀川の川岸へ出る小道の角に道をはさんで建つていた。稻荷宮の境内の方が広く、奥行は現在もある大銀杏の木のところまであつた。稻荷宮は木造の建物が腐朽して、明治の末年には崩れて無くなつたという。他の二社は石の祠であつたが昭和九年にこの三社が合祀され、東町区の人達によつて新しく石祠として再建された。烏居も石造りで建てられた。玉津島神社は祇園宮境内の古い絵図面にある王女神で、祭神は允恭天皇の妃で、容色のすぐれた衣通姫神である。富士本座・玉川座の座名と年号は、ともに以前の古い石祠に刻まれていたのである。(芦屋町誌)

◎烏居 玉津島神社 昭和九年(一九三四)六月

天満神社 東町区東友会

◎石祠 昭和九年(一九三四)六月再建

(裏面に) 富士本座 一 文化十三年(二八一六)
 玉川座 一 文政二年(二八一九)

前氏子総代 杉本 信太郎
現氏子総代 中西 寅吉

前区長 浜野 庄次郎
現区長 長門 清治

区長代理 佐々木 熊市
組長 畑生 寿市 筑田 富次郎 真田 八十三

◎織立石柱 | 中西 勝次郎 和田 乙作 弓削 力之助
明治二十年(二八八七)七月

中ノ浜町壯健中

野出 金太郎 江藤 幾松 三浦 卯之助

上田 松太郎 中原 富太郎 小川 吉太郎

村田 六太郎 二村 傳吉 林 久四郎

三浦 虎吉 池田 豊吉 吉田 磯吉

加藤 富太郎 加藤 門吉 児玉 実平

刀根 永次郎 中西・□吉

この織立石柱に吉田磯吉の名が刻み込まれている

◎石祠 | 大正十二年(一九二三)六月 中ノ濱中

区長 上田房吉 区長代理 高崎新三郎

組長 上田弁太郎 刀根荒吉 中西仲吉

松本 文治 中原富造

◎潮干石 | 福田屋 彦助

◎祠 | (石組みの台があるのみ)

◎鳥居 (蛭子社) | 文久元年(二八六一)再建

町内安全 太田 源次郎道信

◎木祠 |

◎石祠 | 文政十年(二八一七)十一月 和田 吉右衛門

◎潮井石 | 明治二十三年(二八九〇)一月 中西 勘助

◎石祠 |

◎木祠 |

◎木祠 |

◎潮井石 | 明治二十九年(二八九六)一月 中西 勘助

◎夜泣神 | 明治三十二年(二八九九)一月一日

本社通夜連中

◎木祠 | 明治二十六年(二八九三)八月再建

須佐 丈石エ門 吉永 三石エ門

長野 □□門 中西 忠三郎

◎猿田彦大神 | 文政二年(二八一九)三月

◎鳥居 | (破損倒壊したるもの)

天満宮 高蔵宮 の額あり

◎力石 | 昭和五十五年一月

北の湖・輪島・三重の海・若乃花・当代四横綱直筆の名が彫り込んである。直径三〜四十糎、重さ十疋前後の力石が四個ある。

◎志賀(海)神社 | (岡湊神社の境内にある)

24

祭神 志賀三柱太神

住吉太神 (明治四十年末に合祀す)

里人はオシカさまと云い船魂ふねたまの神さまである。昔は船頭衆が集まつて祭りをしていた。また舟大工が寄り集まつて大師講のようなものもつくつていた。

◎鳥居 住吉神社 志賀神社 船玉神社 明治二十四年(一八九二)九月

◎漱盤 明治三十一年(一八九八)十一月

中ノ濱寄附人 三浦 徳兵衛 中西 又七
 刀根 仁平 岩田 芳太郎 上原 平七
 野間 忠市 本田長右エ門 中西百右エ門
 吉田 善作 塩田 源三 村田徳右エ門
 矢野 清八 藤崎 庄市 太田 駒平
 守田 源次郎 古田 弥平

◎潮井 石 明治二十九年(一八九六)一月 中西 勘助

◎社殿

(これより又岡湊神社境内の事に移る。

◎岡南なみ学校の跡の碑

(碑文)

明治五年(一八七二)に制定された学制の趣旨により、翌六年旧千光院を仮校舎として小学校が発足、八年五月市場区に移り芦屋小学校と称した。翌九年四月には岡湊神社の常設舞台を校舎として新しく岡南学校が開設された。同十二年には芦屋小学校は船頭町区に移り岡南学校は合併された。

◎旧玉垣 天保五年(一八三四)二月

旧玉垣は以前に数回修理したのだから、セメントで着けたあとが数ヶ所あつた。筆者が最初記録を取りにいったとき今にも倒れるのではないかと思われるのが数個あつた。昭和五十四年暮までは確かにそのまゝだつたのが、昭和五十五年になって再調査にいった時には新規のものになっていて、こゝに記載の旧のものは西側の隅民家との境に、玉垣としてほぼ原型を保ち移設されているが、順序が変つているし数も幾らか減つている。現在の正面玉垣は昭和五十五年一月に新しく建てられたものである。昭和五十四年暮まであつた旧玉垣の寄進者名記録をこゝに書きとどめる。

(判読できるもののみ正門左側よりの順序)

丸尾屋 源助 吉野屋 藤平 大坂 和泉屋源四郎
 八百屋 儀平 吉野屋 利石エ門
 備後備中藝防長問屋中 世話人 祇園丸 助七
 大坂生籠問屋中 世話人 辨天丸 兵助
 穉月 犀三郎 大坂 吉野屋 茂兵衛
 福田屋 藤次郎 入江 保蔵 刀根 七六正猶
 吉田 文吉 守田 源 田中屋 茂蔵
 □□屋 浜吉 □田 大八平興 毛利 定八
 米屋 定石エ門 大和屋 良平 米屋 興次郎
 須佐屋 定次 久野屋 長平 法印 智圓

□浴屋	平吉	渡辺	兵藏綱友	□屋	文三郎
田中屋	伝三郎	舛屋	半七	俵屋	清吉
江田	喜衛門	政所	国助	塩田屋	久次郎
塩田屋	久右工門	守田	宗助	矢野	嘉六
二村	善五郎	篠原	正兵衛	太田	喜平太
吉野屋	才藏	麴屋	芳右衛門	添田屋	文吉
本松	金三郎	高濱屋	吉十郎	幸屋	定助
萬屋	喜八	大城屋	元右衛門	小田	喜右工門
綿屋	十次郎	梶山	彦次郎	中西	善七
小林	弥一郎	美濃屋	勘七	美濃屋	清三郎
徳田屋	源作	当社市諸方	出店中	塩田屋	石門
添田屋	賢藏	防州柳井	室屋	武兵衛	
防州田布施	蛭子屋	伴右工門			

◎猿 田 彦 大 神 | 青 面 金 剛
 文政五年(一八二二)四月 上町中

※青 面 金 剛
 道祖神には多く庚申塔・庚申尊天または猿田彦大神と刻まれているが、これには猿田彦大神の背面に青面金剛と刻まれている。猿田彦大神は神であり、青面金剛は仏である。表と裏、背あわせに神と仏の名が刻んである。神仏混淆時代のなごりかとも思う。芦屋ではこれ一つ、北九州でも非常に珍らしくまた注目に値する。
 ※青面金剛又は青面金剛明王とも言われている。青面金剛

25

明王は青面とあるから、面相は青く目は真赤でギラギラと光っている。口は大きく牙をむき出しものすごい形相で、青いのは顔だけではなく体全体も青く、手は四本または六本、目が三つで体には大小の蛇が巻きついている、ものすごく恐ろしい形相の仏様である。

◎門 柱 | 明治三十四年(一九〇二)六月 吉田 徳藏
 ◎石 燈 籠 | 天保四年(一八三三)二月再建
 芦屋町 小田 和藏 山鹿魚町 小田 定行衛門

費海山と号す。禅宗臨濟派(博多)崇福寺末なり。開山大覺禪師道隆は元国より帰化の僧にて文永四年(一一六七)この寺を建立すと云う。本尊釈迦如来(坐像高さ三尺)は運慶の作にて古仏なり。(遠賀郡誌)
 右脇壇には達磨大師の坐像あり。
 ※火 除 け 達 磨 の 古 画 像 |
 禅寿寺に「火除達磨」という古い画像がある。菩薩達磨圓覺大師の画像であるが、寛保年間当寺が火災にかゝったとき、数日後焼跡から発見されたこの画像は、少しの損傷も受けていなかったという。その後幾度かの大火にも焼けなかった。近くは昭和四年三月船頭町全域の大火のとき、岡湊神社も禅寿寺も焼失したが、圓覺大師の影像といわれるこの画像だけは無事であり、また昭和二十八年十一月四日禅寿寺わきの商

店三戸四世帯が全焼したとき、すぐそばだったのに禅寿寺には一片の飛び火もなかったという。この画像は今も保存されている。(芦屋町誌)

※昭和四年三月の芦屋町大火災にて全焼した禅寿寺は吉田三郎氏によって再建された。惣門だけは焼けずに昔時をしのぼしている。

吉田三郎氏は明治三十一年芦屋町船頭町に生る。長じて上京し大隅桂藏に師事した。大正四年には東京講道館に入り柔道を修業した。昭和二年に芦屋大統社を創立す。後に大統社工業塾を船頭町に創立す。昭和四十四年二月七十二才にて没す。

(芦屋町誌)

◎御 國 六 十 二 番 札 所 一

明治三十三年(一九〇〇)八月

◎惣 門 一 昭和四年三月の大火災の時これだけは残った。

◎鐘 楼 跡 一 石垣積み of 土台のみ。(現在は無い)

◎石 仏 一 以前地藏堂に祭つてあつたお地藏様である。

◎種 杏 菴 兼 哲 居 土 の 碑 一

禅寿寺に縁故の深い人のものと思うが明らかならず。

◎本 堂 一

◎五 重 層 塔 一 天保二年(一八三二)四月

塔身の四面に多くの梵字が刻まれている。

光明真言寶塔再建

当山四十世権大僧都法印智圓誌

(基礎石に寄進者の名が刻まれているのだが東側の石の

表面が剝落、損傷がはげしく判読がむづかしいので
崗五号田中八郎氏の稿より)

惠比須屋 茂助 紀伊国屋藤石衛門 高浜屋 畝助

浦松屋 善九郎 掛屋 喜代松 掛屋 三郎平

関屋 清次郎 田中屋 傳三郎 塩屋 傳四郎

若松屋 善九郎 穂坂 元孚 米屋 傳次郎

俵屋 茂七 吉野屋 七六 吉野屋 七藏

惠比須屋徳兵衛 萬屋 武平 植木屋 善藏

植木屋 善助 塩屋 与右衛門 塩屋 久兵衛

五重層塔は貴重な塔という意味で、通称「宝塔」と呼ぶ場合があるが、構造上の宝塔は別の型である。

五重層塔は墓の一種で形そのものは現在でも各地に数多く残っているが、方形の五つの層に二十八字もの梵字が刻み込まれているものは北九州地区にも見当たらないという。

明治政府の「神仏判然令」で千光院内にあった五重層塔(高さ約七メートル)は、船頭町の若者達によって一夜のうちに現在地に移設されたといわれる。明治五年のことである。

この塔は弘法大師千年忌に地元の豪商達により建立されたものである。芦屋にある寺院の史跡類は明治初期にほとんど壊されている。この塔がこれまで生き残っているのが不思議なくらいだ。この形式の塔は県内にも残っていないようだ。(崗五号田中八郎)

◎大 銀 杏 の 木 一

◎水盤

◎地藏堂跡

地藏堂に祭つてあつたお地藏様は現在庫裏くらの入口にある。

◎石段 | 大正五年(一九一六)四月 妹尾 秀二

◎門柱 | 明治四十一年(一九〇八)八月

船頭町大師講社中 泉原 武石工門 中西 勘助

柴田 治七 妹尾 秀二

◎宝篋印塔 | 文政元年(一八一八)七月

経曰 大乘妙典 一字一石

和田 吉右衛門 村田 専吉 中西 善藏

和田 武平 太田 保右衛門 和田 吉平

◎大師堂(現在は納骨堂)と八十八体の仏像

明治五年神仏混淆を嚴禁せられし際、岡湊神社々僧の坊千光院にありしを、禅寿寺境内に移設したと「遠賀郡誌」にあるが、大師堂は老朽破損したのでその跡に納骨堂が建立された。八十八体の仏像は納骨堂の周囲にお祭りしてある。

遠賀 川西四国第八十八番札所

本尊 薬師如来

(納骨堂の裏に廻る)

◎三界万靈一石合銘 | 太田 喜兵衛演貞

◎南無大師遍照金剛 |

明治三十三年(一九〇〇)八月

光明真言十万遍 四國須拝講社中

◎弘法大師坐像 | 文政十一年(一八二八)正月

◎石蘭の句碑 | 文化三年(一八〇六)二月

人すまぬ 此山井や 秋乃月 石蘭

この句碑は石蘭の没した翌年に、妻である知栄が勧進して建立したものである。

◎芭蕉翁菖蒲塚 | 寛政五歳(一七九三)

郭公はなご 啼や五尺の あやめ草

桂菴 宇麦 発起

麴亭 保能香

吉永 松卜 建之

太田 希王

◎大乘妙典一字一石 | 嗣志 吉永 松卜 建之

宝曆四年(一七五四)九月 太田 序六 同人 妻

◎石鉄山の碑 |

◎弘法大師立像 | 南無大師遍照金剛

(本堂裏)

◎鳥居 | 大正八年(一九一九)三月

正一位 大國廣神社 上野 瓶城 手嶋 助吉

森茂 神社 八尋 義輔 安武 源七

◎石祠 | 明治三十五年(一九〇二)正月 高崎 儀之助

◎中岳允首座塔 | 享□元年

横に倒れ大部分は土に埋まっている。何か古事来歴がありそつだが不明。

中央公園 — (旧船頭町) 船頭町八一

◎合戦ヶ原の碑 —
(碑文)

東鑑によれば元暦二年(一一八五)二月一日、葦屋浦において北條義時・下河邊行平・澁谷重国らの源氏軍が、平家方の九州勢原田種直その子賀摩兵衛尉らと戦つて大いにこれを撃破した。このあたり一帯の砂丘がその戦場であつたといふと伝える。この合戦の約五十日後壇の浦で平家は滅び、兵藤次秀遠のひきいた山鹿水軍は敗北の痛手を受けた。

※中央公園と葦屋町民会館のある所は、高さ二五メートル程の小高い砂丘であつて、葦屋中学校の所まで続いていた。この砂丘を里人は合戦あはせ或は合戦ヶ丘と称していた。昭和三十年葦屋町が砂を処分して平坦地にした。

◎戦没者慰霊塔 — 昭和三十七年(一九六二)
各戦役に殉ぜられた郷土葦屋町出身の諸英霊四〇五柱の霊を合祀する。

◎石川重雄紀功碑 —

明治四十四年(一九一三)三月

◎故石川町長五十年祭之碑 —

昭和三十七年(一九六二)四月 葦屋町先賢顕彰会

(碑文)

石川重雄氏は嘉永五年(一八五二)一月黒田藩士として福岡に生れ、廃藩後本城村に帰農、明治二十五年一月葦屋町長

に選ばれ町村制施行直後の自治体確立に努力、小学校の新築・義務教育の普及・学校基本財産の造成・納税準備組合の奨励等 治績を取め、明治三十八年十一月山鹿村との合併を成立せしめ、同三十九年三月初代の新葦屋町長に当選、同四十年三月教育功績者として文部大臣より選奨されたが、同年十一月山鹿小学校の天長節奉祝式場にて脳溢血に倒れられ、翌四十一年五月退任された。町民挙つて其の徳を慕ひ明治四十四年三月紀功碑を建つ。大正二年三月令六十二歳をもって逝去された。爰に五十年祭を挙行し本碑を建てる。

地蔵堂 — 中ノ浜九一—二

遠賀 川西四国奥之院
本尊 立江地藏尊

徳島県小松市立江町にある立江寺ゆかりの地藏尊

蘆屋尋常小学校趾の碑 —
(碑文)

中ノ浜 葦屋中学校入口

明治五年(一八八七)学制発布により翌六年葦屋小学校は旧千光院を仮校舎として創立、同八年市場区に移転、同九年発足の岡南学校を同十二年に合併同地に移る。明治十九年葦屋尋常小学校となり、同二十五年七月中ノ浜の高台に新築移転す。本校は葦屋教育の中心となり、町民の熱意により明治三十四年福岡県下第一の旌表旗を授与され、大正三年葦屋尋常高等小学校に統合された。

※旌表 旗の由来

旌とは鳥の羽で飾った旗のことで表彰するという意味があり、旌表とはほめあらわすことで善行をほめ衆人に知らせるといふ意味がある。

その財源は明治二十七、二十八年日清戦争に勝った日本が、清国より獲得した賠償金の中、貳千万円を教育資金としてこれに当て、内利息五十万円を普通教育奨励費として各府県に交付した。福岡県への交付金は毎年壹万七千円であった。福岡県では旌表旗制度をつくり、就学・出席率に重点が置かれ九十七%以上でないとその対象にならなかった。旌表旗は大正十二年まで授与され、その後は表彰するだけになり昭和二十年まで続けられた。

芦屋小学校が旌表旗制度が設けられた第一回目(明治三十四年)にもらい、山鹿小学校が、この旗が授与された最後(大正十二年)の学校群にはいったわけである。(崗五号・柴田正生)

29

芦屋町立歴史民俗資料館

中ノ浜四一四

遠賀川河口芦屋は、遠い昔から港として重要な位置を占めてきた。川と海を舞台にしてきた先祖の歴史を物語る数多くの文化遺産は、私達に色々なことを語りかける。しかし最近、激しい開発と生産様式や日常生活の変ほうは貴重な歴史的遺産を急速に消滅させている。こうした実状にもとずき郷土固有の歴史の推移を正しく理解し、町民の協力により収集され

た資料の保存をはかると共に一般に公開して活用するため昭和五十三年八月設置された。

◎芦屋釜

芦屋釜は名器として知られ、鎌倉から江戸中期までの永い間、湯釜の最高級品として名声を得ている。特に室町時代から織田信長・豊臣秀吉の時代に茶の湯の流行と共に、天下の名声を博したもので、砂鉄を原料とし「引中心」と称する精巧かつ独特な技法でつくられている。

今から四〇〇年ぐらい前ごろまでは、芦屋には優秀な鑄物師が数多くいて釜・釣鐘・鳥居・置物・金風呂などを鑄造しておった。これらの鑄物師の多くは、旧町名である金屋町(現在は中ノ浜と西浜町に分れているが、北九州市営バス停芦屋橋を中心にした周辺)に住住していた。昔はこゝの町名を釜屋町と云っていた。名工中特に太田・長野の姓を称する者が有名であった。(芦屋の栞)

◎茶の十徳釜

茶の湯釜の研究家であり、芦屋釜の研究家でもある故長野埜志氏は、その著「茶の湯釜研究―芦屋釜」の中で次のように述べられている。茶の十徳釜こそ筑前芦屋の一番古い祖形に近い遺品と考えられ、建仁年間梅尾の明恵上人が筑前芦屋に命じ「茶の十徳句文を釜に鑄つけさせた」と書いてあるのはこの釜ではないか。この釜の形態は世に三口しか見つからず、藤原時代の感じを残している」と、なお又

氏は茶の十徳釜が現存する茶の湯釜の中では、もっとも古い鎌倉初期の作品であることを、その形やかん付の形式などから説明されている。

この茶の十徳釜の口径は一二・四廻、胴径は二三廻、高さ一六・二廻でかん付は茶の実となつてゐる。(広報あしや第五十号)

◎素文平蜘蛛釜 一

昭和三十三年七月二十四日発掘

芦屋町民会館のある所、以前は中央公園より芦屋中学校のある所まで、高さ二十五メートルほどの小高い丘で合戦ヶ原と呼ばれていた。昭和三十年からこゝを平坦地にするため、この砂山の砂を取り除き中二十四メートルばかりの砂中から、この素文平蜘蛛釜が出土した。まぎれもない芦屋釜である。高さが低く又ひらく口も大きいので湯を沸すのに使いやすく、鎌倉時代より一般に使われていたものらしい。(芦屋町誌)

◎八朔節句の配り馬 一

芦屋独特の年中行事の一つとして、八朔の節句(県指定無形民俗文化財)がある。八朔の祝いは旧暦の八月朔日に行なわれていたが、現在は九月一日に行つてゐる。初節句を迎える男の子供のある家では、わが子が元気で強く育つように祈つて藁馬を作り、女の子の場合には団子雛を作つて飾る風習が、寛永十二〜三年頃から始まったと伝えられ、約

三百四十年の歴史と共に今もなお続いている。

馬はスグリ藁を束ねて馬の形に作り、紙で作つた武者人形をこの馬に跨がらせ、そのうしろに旗さしものを立て、この旗には山鹿兵藤次秀遠・織田信長・豊臣秀吉・徳川家康などの歴史上名高い武将の名が書いてある。男の子がこのような武将のようにたくましく又元気に強く育つようあやかりたい親心のあらわれであろう。

ダゴビーナはもち米をひき蒸したものを搗いて、食紅で色をつけつゝ雛人形を作る。そのほかに野菜や花や料理を盛つたお膳なども作る。馬も雛も何十となく多いところでは百以上も作つて床の間に飾り、朔日一日を家じゅうで祝うと、翌二日は夜の明けるのを待つて近隣の子供たちが我さきにと貰いに来る。

※藁馬に紙製の武者人形を乗せて祝う行事は、黒田長政公が筑前五十二万石の藩主として入国され、代々藩主江戸参勤のとき又帰国の折に、芦屋の神武社に家老を代参させた。その日馬に乗つて同社に参拝する威風堂々たる姿から思いついたのが始まりだとも云われている。

※また紅白の餅を搗き男子の場合は馬、女子の場合は雛人形の絵の刷りものに「八朔賀 某」と子供の名前を書いたものを添え、祝儀を買つた近隣や親しい家々に配る風習が今もなお残つてゐる。八朔賀の配り物に添える二匹馬の刷り絵の当初の原画は画家吉田千鶴が描いたものだと言われている。

(芦屋町誌)

◎八朔 節句の引馬 一

特に男児の初節句の家では、長さ三尺余、巾二尺余の台箱に車や手摺を設け、その上に金銀の箔に輝やく豪華な鞍や鏡をつけた木彫り又は張子の馬をのせ、後部に竹笹を立てて、翌二日の終日を近隣の子供にひかせて町内を廻る。

「ハインドウドウお馬のお通り先のけ先のけ」と声高らかに引かれて行く馬の後を追って、その家の縁故者は無論親交ある者は、みな祝儀袋や菓子袋を又或人は短冊に歌を書いて竹笹に結び付ける。竹笹に吊り下げられるこれ等の祝儀袋や菓子袋・短冊の数が多ければ多いほど、その家の附合の広さを示し又自慢になるのである。(芦屋の葉)

※芦屋町立歴史民俗資料館内には筑前芦屋町ならではと云える芦屋独特の民俗資料が数多く陳列してあるが、きりがないのでこの紙面では以上にとどめる。

(歴史民俗資料館の北裏側の別棟に)

◎川 船 (県指定有形民俗文化財)

(説 明 板)

川船は古来遠賀川の水道を利用して、筑豊各地の穀物・蠟・木材等の産物を運搬していた船で、これらの産物は芦屋に集荷されると大型船によって需用地に積出されていた。江戸時代になり石炭が発見されてからは、専ら筑豊炭田の石炭運搬船として使用されるようになり、五平太船とも呼ばれ一時は総数七千艘に至ったのである。明治時代に入り、

鉄道が開通し若松が石炭積出港となつてからは、石炭輸送は漸次鉄道輸送にかわり、川船は砂運搬船として身を変え時代の推移と共に姿を消して行つたのである。

現在はこの川船の外に、八幡区析尾高校にも一艘保存してあるのみである。

※此所に展示してある船は昭和三十年代まで、芦屋町の中西儀七郎の持船として大正期まで石炭を運び、後に川砂運搬に転用されたものである。この船は木造船で三枚ダナ、長さ十三・八メートル巾二・七メートル深さ〇・六メートルで川船としては最も大きい型である。

※船の中には船頭さんが寝とまり出来るように、中央に奥行二メートル高さ一メートルほどの屋根がはつてある。水甕や船箆筒・寝具等の生活用具も中に積まれていた。こゝを居間と云い船頭たちはこゝで食事をしたり寝たりした。これは所帯船、その他に食事設備のない番茶船、石炭を積むだけのハダカ船と川船にはいろんな種類があつたという。

※遠賀川は帆を張って運行もしたが、浅瀬になると上りの時は川にはいつて船を引っぱつた。堀川では櫂や水棹をあやつり、また空船は陸上から縄で引っぱつた。船の縁は水棹をあやつるとき、船頭が前後に歩きやすいように巾をひろく造られていた。この船の特長は船底が浅いことであつて、遠賀川を初め堀川・江川も浅瀬が多いので、船底を平たく浅くして団平船型になつてゐる。

※明治維新以前、藩では遠賀・鞍手・嘉麻・穂波四郡の貢米を、川艀に積んで遠賀川を芦屋まで下り芦屋に集積し、大船に積んで大阪表へ送っていた。明治維新以後、貢米の輸送はなくなったが、川艀は筑豊地帯の石炭・玄米・石灰石・生蠟木材などを積んで遠賀川を下っていた。筑豊炭田の開発が進むにつれて各炭坑で採掘された石炭は、馬や車力しゆりきによって近くの川岸に運ばれ、積場から唯一の石炭搬送船である川艀に積みこまれて遠賀川を下った。この川艀によって芦屋港に集荷された石炭はこゝで千石積み的大型帆船に積み替えられ、遠く需要港に向けられたのである。川艀は重要な役割りを果たすことになった。船数もにわかになふえ、明治三十年頃には七千艘にも達するのであるが、遠賀郡内の川艀がその半数を占め、その主力になって活動したのが芦屋・山鹿の川艀であった。これらの川艀が芦屋の港に集って本船に積荷を積みかえる船や、江川を抜けて洞海湾に行く汐まち船と共に、遠賀川の河口は帆柱の林立で対岸の景色が見えない程であったという。しかし明治二十四年筑豊線開通と共に、遠賀川の川艀による石炭の輸送は減少してゆき、一時は七千艘を数えた川艀もだんだん数を減じ、明治末年には約二千五百艘、大正十二年には千余艘に減り、十五年には五百余艘を数えるのみとなった。大正中期頃より川艀は遠賀川の川砂を洞海湾に運ぶ砂船に変わっていった。

※石炭の発掘以後、貢米積川艀に交って石炭積川艀が遠賀川

を往来するようになった。五平太船と呼ばれたが名称の由来については種々の説がある。一説には寛政の末、九州平戸領深江村の五平太という男が高島に渡り、石炭を掘って販売していた為この名称がおこったともいう。慶長年間、木材・雑貨など運ぶ川船を比良太と呼び、一般に「平太」と書いた。福岡城の築城のとき、又は江戸城・大阪城の築城工事に藩から建築材料を積み出したり、また遠賀川の改修・吉田の切貫きりぬきなど、藩の御用として「平太」が遠賀川を上下したことから、一般に「御平太」と尊称されたともいう。御平太がいつの間にか五平太と書くようになり、あたかも人の名であるかのように考えられたのだという説もある。以上説にはいろいろあるが、浅瀬を通るために吃水くつみずが浅くされていたので「浅舟」とも称されていたが、芦屋の船頭さんは単に「川舟」と呼んでいた。※川艀はふつう五〜六艘で一組をつくるが、多いのは一組が十四〜五艘から二十艘のものもあり、少ないのは二〜三艘のものもあつた。たいてい一人乗りだが、船頭見習いのために十五〜六才の少年を、何年間幾らという契約で船に乗せることもあつた。これを片乗かたのりという。組内の船には世帯船がいて食事などはそこですませた。船頭は自分で船を持っているものもあれば、船主に雇われる者もあり、また農業・漁業の合間に小使いかせぎに船に乗る者もいたが、芦屋町の船頭はほとんどが専業であつた。

※五平太船と称された川艀の船頭たちの気風も荒かった。

「五平太船頭のどこ見て惚れた、色は黒いが川筋育ち、喧嘩早いが情にゃもろい、水にうつした晒ベコ」という歌にみられるように、船頭たちは夏はフンドシ一本、冬はドンザ（刺子の尻切半纏まははん）を着て船をあやつった。炭坑夫と同じように飲む、打つ、買う、それに喧嘩が日常であった。船頭仲間にも親分、子分、兄弟分の義理人情にあつい人間関係が生まれた。こういう徒の集団だから、その日常も常規を以って律し難きものが多く、荷物・荷主の争奪は勿論、舟の縁がさわつたとか、後から来て追い越したとか言う場合に仁義をしなかつた事から随所に船頭どもの争斗が始った。血腥い出入は殆んど毎日であつたという。

気は荒いが淡白な気性、義理人情に生き、義侠心には富んでいるが「何んちかんち言いなんな、理屈はなかない」というふうに、理屈よりも先に行動で示す言論無用「腕で来い」の世界であつた。

大正鉱業の創始者伊藤傳六・伊藤傳右衛門父子は川艀の船頭をしていた。芦屋に生れた吉田磯吉翁も青年のころは川艀に乗っていた。

※北九州市の依頼により、最後の五平太船を造つた船大工故中西吉兵衛氏が元氣なころ話されたこと。家は江戸時代からの舟大工で、わたしが七代目だ。川艀の材料は主に杉の木でこの近所の山から切り出したものを木挽にひかせ、船は他人を使わずたいいてい一人で造つた。一艘造るのにだいたい六十人役（六十日）かゝつたものだ。一艘の船は十年くらいもつ。

底板は一寸二分（三六糎）だが、石炭をジカに積んでスコップですくい上げるのだから、うすくなつて四分か六分くらいになる。家が川ぶちなので川に面した方を造船場にして出来るとすぐ進水させていたが、みんな酒を持ちよつて盛大な進水式をしていた。山鹿にも船を造る所が出来ていたが舟大工は大島や地島から来ていたように思う。船の神様というのはオシカ様で、昔は一月何日かに船頭が集つて盛大に祭りをしていたし、舟大工が寄つて大師講のようなものもつくつていた。（芦屋町誌）

◎山 鹿 城 跡 中 世 火 葬 墓 石 塔 一

これらの墓石が発掘された城山公園は約八百年前、源平の壇ノ浦合戦で平家を助け水軍として活躍した、筑前の豪族山鹿兵藤次秀遠の城跡で山鹿氏が壇ノ浦で滅びて後は麻生氏これにかわり城主となる。昭和五十二年三月城山公園の散策道建設工事中、五輪塔など中世の墓地遺跡群が発見され、町教委と県教委が調査した。この調査で五輪塔など供養塔約十余基を発掘、人骨片などの埋蔵遺跡が点在しているのが確認された。発掘された墓石には年代も名前もないが、形や刻み込まれている梵字などから、南北朝時代から室町時代初期にかけてのものと思われる。また城跡本丸の一角で見つかり遺骨が火葬されていることで同城の身分の高い武将の墓群と推定される。資料の少ない中世の山鹿城の貴重な出土品である。（広報あしや）

※昭和五十二年三月五日山鹿城跡城山公園の北西側中腹に

散策道の工事中、十一纏立方体で四面に梵字が刻み込んである石が発見された。芦屋町教育委員会に連絡があり、宝篋印塔の一部であることがわかり、教育委員長と文化財保存委員鈴木長敏氏・郷土史家藤本春秋子氏等が早速現場に行き、現地調査の結果確認のため六日より今少し掘ってみる事にした。六日にはまとまったものは出なかつたが、バラバラながら宝篋印塔一基分、五輪塔三基分が堀り出された。以上の話を耳にしたので筆者も七日に現場に行ってみた。土を堀り除いているうちに、十五纏巾で長さ五十纏ぐらいの平たい石が三枚列んで縦に埋められているのが出てきたので早速教育委員会に知らせに走る。行っている間に仏像が二体堀り出されていた。文化財保存委員会から県文化課へ連絡したので、県より松岡調査係長が来られて、本格的に発掘調査をすることになった。吉岡助手も来られ日をおつて発掘が進むにつれて、五輪塔が部分的ではあるが数個堀り出された。まとまったものは一つもなかつた。

墓群の広さは前面約八メートル奥行約二・五メートルのほぼ長方形で、発掘状況より推測すれば約十五基分はあつただろうということだ。全面に海岸で波に洗われた拳大の黒色の石が二十纏程の厚さに敷きつめられていた。骨は火葬したもので骨らしく原形をとどめているのはほんの少しで、粉々になって土とまざっているのが大部分で、まとまっているのが五、六ヶ所ぐらいであとは散布したような状態で土とまざっていて、箸でつまんで骨をひろい集めるのに大変な時間と労力

を要した。今回の発掘調査で特に記するものといえは、頭骸骨の上部が一個出たことだ。これは頭骸骨の上に平たい石が一枚かぶせるようにのつかつていた。この頭骸骨は形をこわさないように、下部まで土と一緒に堀り出して県文化課に持ち帰った。性別・年令・年代等の調査をする由また土師器の小さな破片が数個と珠光青磁の小さな破片が一個出土した。発掘調査の期間は三週間ばかりで三月二十八日に終った。発掘のあとは堀り出した拳大の石をもとのように敷きつめて列べ、その上に土をかぶせて埋めもどした。今は散策道となつている。松岡係長の話では発掘したばかりではつきりは言えないが、宝篋印塔や五輪塔の形から推測すれば南北朝時代(約六〇〇年前)のものである。城郭内に墓群があつた話は聞かされたのは始めてなのように原形をとどめてあるのを手がけるのは始めてなので貴重な資料になる。おそらく山鹿城ゆかりの武将の墓であろうと。

◎宝塔 — 一重の塔で基礎・笠は方形・塔身だけが平面円形で首があることが特色である。(日本歴史大辞典)
この宝塔は形式・技量・調刻などからみて、南北朝初期鎌倉期に入るのはないかと推定される。昭和三十三年旧芦屋町役場建設工事(現在地)のためブルトーザーで整地中に見つかったものである。塔身は八面でその六面には一つづつ仏像が刻んであり、その下の方形の基礎石の前面にも二体の仏像が刻んである。

30

宗 祇 の 句 碑 — 芦屋町文化福祉センターの裏

川 簾 の 前 昭 和 五 十 五 年 (二 九 八 〇) 十 月 四 日

(碑 表)

かくて程もなく、あしやになりぬ。真砂たかうして山のごとくなるに、松ただむら立ちて、寺々あまた見えわたる。民の家居^のの苦や数ならず。川のむかひは山つらなりて、さまざまみすてがたき折から、時雨いさゝかうちそゝぎ、夕月夜さやかにさしのほりたるなど、つくり合はせたるやうなり。

「筑紫道記」

いつきかむ あしやの月の 夕しぐれ

(碑 裏)

宗祇法師は大内政弘のすゝめと手厚い庇護を受け、周防山口から筑紫路へと紀行、その道すがら文明十二年(二四八〇)十月四日芦屋に立ち寄り、麻生兵部大輔の糞筵にのぞみ、発句を所望され

追かぜも 待たぬ木の葉の 舟出かな

と吟じ翌五日舟で立ち去っている。

※宗祇は室町時代の古典学、連歌の第一人者。足跡は東は日光・白河西は九州におよび、旅から旅をしていた。文亀二年(二五〇二)船八十二才にて湯本に客死す。(日本歴史大辞典) ※宗祇が芦屋に足跡を印したことを記念して、五百年後の月日も同じ十月四日に、こゝに宗祇の句碑を建てた。

31

長 野 政 八 翁 の 立 像 — 中ノ浜九一二

昭 和 二 十 九 年 (一 九 五 三) 三 月

32

旧 芦 屋 橋 跡 — 遠賀信用金庫芦屋支店の裏

◎ 蘆 屋 橋 の 欄 干 本 柱 石 —

大 正 六 年 (二 九 一 七) 四 月

明治二十六年芦屋に生る。久留米商業学校卒業後、家業の魚問屋を継ぎ、家業のかたわら芦屋町発展のために努力した。昭和十六年六月芦屋町名誉町長に選ばれて就任、二十一年十一月退任するまでの五ヶ年余、戦前戦後の困難な時期を町のために尽力した。太田山(現在の町民会館・中央公園一帯は小高い砂丘であった)の町有確保、戦時中の町民の指導など業績は多いが、特に戦争末期、焼夷弾の被害を少なくするため、天井板をはがせという軍命令が出、北九州方面では実行にうつされたが、長野町長は自己の信念と判断とによって芦屋町では天井板を落とさせなかった。戦局が悪化し空襲もまたはげしくなるなかで、動揺しがちな町民の心の指導にもっとも心をもちいた。米軍進駐後は米軍との円滑な政治工作に任じた。退任後、福岡県魚市場株式会社社長に就任し、福岡の財界で重きをなしたが、多忙中芦屋町に帰っては後進の指導を怠らなかつた。特に敬老の念が深く、白鷺の劇場・映画館で毎年個人的に敬老会をもよほし、老人達をなぐさめた。芦屋町が競艇場開設を企画し資金難に直面した際は、在福郷士人に呼びかけて資金獲得に協力を惜しまなかつた。没したのは昭和二十八年五月三十一日である。享年六十一歳。昭和二十九年翁の功績をしのびつゝこの碑を建つ。(芦屋町誌)

これは旧芦屋橋があつたときの其まゝのものである。
 芦屋・山鹿間に橋を架けることは早くからの懸案であつた。
 大正五年五月一日地鎮祭を施行して工事に着手した。全長
 二七〇メートル幅員約四メートルの芦屋橋（コンクリート製）
 が竣工したのは、一年後の大正六年四月十日である。工事費
 総額は四万四千三百三十七円二十一銭であつた。最初の計画ど
 おり有料橋とすることにし渡橋料を次のように定めた。

人	一人	一錢
牛馬	口付人夫共	二錢
荷積牛馬車	口付人夫共	二錢
二人持荷	担夫二人共	二錢
人力車	車夫共	二錢
自転車		一錢
馬車		五錢
自動車		五錢

大正八年度より芦屋橋は県有となり、渡橋料の徴収は停止さ
 れた。その後芦屋橋は台風や洪水のため地盤が沈下し、年々
 橋げたが下がってゆき、昭和十年六月の大洪水によって中央
 部分が沈下屈折して、通行に支障をきたす状態になつたので
 損傷の箇所を四寸角柱を並べたり、厚い板を敷いて車の運行
 や人の歩行に支障のないように処置されていたが、県によつ
 て新たに架橋が計画され、旧橋から約一七五メートルの下流
 に昭和十五年現在の芦屋橋が架橋された。

※明治初年から明治四十年にいたるまで、芦屋山鹿間の渡船
 は民間人によって経営されていた。
 渡船料（明治十一年）は次のようであつた。

人	一人	三厘
牛馬一匹	但口取人夫共	七厘
荷車輛	但車夫一人共	七厘
両掛一荷	但人足共	五厘
人力車輛	但車夫一人共	五厘
駕籠長持	但人足二人共	八厘

渡船は四艘いて、時によっては二艘、一艘で客や貨物などを
 運んだが、天候によっては一日十回ぐらしか通わぬことも
 あり、また欠航することもあつた。梅雨期には出水で何日間
 も停止した。山鹿方面から芦屋に勤めをもつ者、また芦屋高
 等小学校へ通っている者も多かつたから、朝の渡船時は特に
 混雑した。

芦屋町では明治四十年三月渡船を買収して町営にし、四月一
 日から民間人を指名受負人として渡船業務にたづさわらせ、
 町が新造船をつくるまで従来の船四艘を使用することにした。

渡船料	明治四十年四月—同年六月改正		
人	一人	六厘	一錢
人力車輛	車夫一人共	一錢	一錢五厘
牛馬一頭	口付一人共	一錢一厘	二錢
負荷物一荷	担夫共	一錢三厘	一錢五厘

二人持荷物一棹 担夫二人共 一錢六厘 二錢五厘
 荷積牛馬車一輛 両口付一人共 二錢五厘 三錢五厘
 自軛車一輛 乘人共 一錢 一錢
 年齢五才以上十三才以下は半額、五才未満は無賃、
 一日中往復する者は賃銀は一回のみ徴収、
 軍人・警察官・郵便集配人などは無料だった。(芦屋町誌)

安養寺 一 中ノ浜五―五二

慈雲山と号し真宗本派西京本願寺に属し中本山たり。天文十一年(一五四二)宗像氏貞の臣道恩、世の無常を感じ戦塵を厭い大城たけしろに草庵を建てた。天文二十二年(一五五三)九月木仏寺の号を許された。始めは豊前国小倉永照寺の末であったが、慶長十九年(一六一四)藩主黒田長政の特別の意により、西本願寺直参寺となる。寛永十年(一六三三)大城より船頭町に移せしを、元禄二年(一六八九)現在の地に移された。

(芦屋町誌)

- ◎門 柱 一 明治二十一年(一八八八)五月 永田喜五郎
- ◎窓 門 一 享和二年(一八〇二)再建
- ◎かな や の 松 の 碑 一 西本願寺門主様御銘
- ◎鐘 楼 一 明治十八年(一八八五) 万徳寄進再建
- ◎石 燈 籠 一 文久元年(一八六二)三月
- 破 闍 燈 親鸞上人六百回忌大法会
- 般若 燈 小野 清次郎茂廣

◎本 堂 一

◎恩 厚 の 碑 一 昭和十三戊寅年(一九三八)十月

門主御巡教記念

◎親 鸞 上 人 立 像 (銅製) 一

昭和四十九年(一九七四)三月

本堂庫裡改修記念

◎燈 籠 一 小野 清次郎

◎水 盤 一 明治二十〇〇〇 石工 太閤水たごうみづ 八十吉

猪熊いぐま 原田 三七 竹並たけなみ 宮野 久八

◎太 鼓 堂 一 明治二十四年(一八九一) 美濃屋寄進

美濃屋五代目柴田芳之助(勘七)が亡父及先祖代々供養のため寄進建立したものである。美濃屋四代目柴田勘七は明治二十三年五月一日に没した。行年六十九歳。法名は信楽院釈宗真柔軟居士。美濃屋四代目柴田勘七は筆者の祖父にあたる。

◎燈 籠 (東側入口脇門の所にある) 一 小野 清次郎

◎鬼 瓦 一 本堂の屋根にあつたもの

(裏の墓地に)

◎三 界 万 靈 塔 一 天保十一年(一八四〇)

安高 平六淳信

◎江 藤 信 照 の 墓 一 明治十八年(一八八五)

安川 敬一郎 外

帯霞江藤信照墓とあり、辞世の句であろう次のようにしるされている。

海雲寺 — (旧金屋町) 中ノ浜五十一六

散るときは どふしても散る 桜かな
 父は芦屋町の大保正格で文政十年(一八二七)その二子として生れる。芦屋郵便局の初代局長で明治十七月一月に割腹自決したという。享年五十八歳。俳句をたしなみ帯霞と号す。

江岳山西福院と号す。天台宗叡山派博多妙音寺末なり。万治二年(一六五九)秀山といえる僧再興せり。本尊は毘沙門天(立像三尺) 一つの頃にや寺下の井戸の中より出現せりと云う。因って今も此の井戸を毘沙門井戸と云う。脇壇に不動の木像(立像二尺)あり。仏師春日の作と云う。

この寺明治十三年(一八八〇)県立芦屋中学校を建設するにあたり境内の大半を割典せしが、明治三十五年芦屋高等小学校を改築せんとするにあたり、敷地の拡張を要するより寺地の残部を同校に悉く売却し、其の代りに隣地の芦屋町公会堂を芦屋町より無償にて譲り受けて移転したり。(遠賀郡誌)

◎宝篋印塔(県指定有形民俗文化財) —

(説明板)

享和三年(一八〇三)春

この宝篋印塔は高さ約六メートル強、基壇三段仕立、赤味をおびた花崗岩を使用している。塔身に銅製の経筒及び銅板文を納め、保存状況は良好である。経筒に「法篋印陀羅尼」を書写し奉る。紺糸金泥八万四千巻の内、遍照金剛豪潮、

享和三癸亥春吉辰」とあり、銅板銘には「寛政戊午火災の亡魂及び依るべき無怙の法界万霊のために・・・」と、この宝篋印塔を建立した主旨を刻んである。発願者豪潮は肥後の人、天台宗の高僧で諸国八万八千塔造立を発願、諸国に建立を実現した人物である。この宝篋印塔は大きく作柄も極めて優雅で福岡県下では最もよく保存された代表的なものである。銘文によると寛政五年(一七九三)の火災による焼亡者等供養のために、地元の人々の協力を得て享和三年(一八〇三)に造立したと云う。造立年次・発願事由・造立発願者共に明らかな貴重な資料である。銘は豪潮律師の筆である。

※豪潮律師は寛延二年(一七四九)肥後国(熊本県)玉名郡の真宗本派安養寺塔頭泉光寺二世貫通和尚の二男に生まれた。はじめ同郡高瀬町繁根木山寿福寺の豪旭阿闍梨の門に入り快潮と称したが、のち比叡山で修学し十九歳のとき権律師に補任された。翌年法眼和尚の位に補任され、比叡山で秘法をさずかり、名を豪潮と改め、大阿闍梨の位に上った。二十三歳で伝灯大法師位豪潮と称し、天台宗専寺に補任されている。二十八歳のとき繁根木山寿福寺の住職になった。高德は遠近に聞こえ、帰依するものが多かった。諸所を巡り歩き、一時太宰府戒壇院に足をとめていたこともあったという。

※豪潮が全国に宝篋印塔を八万四千基建てるという大誓願をおこし、信徒に勧進して諸方にこれの実現方を推進し、それに着手したのは享和二年(一八〇二)五十四歳のときであるか

ら、芦屋の法篋印塔は初期に属するものである。

天保六年（一八三五）名古屋の時雨庵にて八十七歳で没するまで、全国各地に石・銅・木・鉄などで造った大小約五千基以上の宝篋印塔を建立したと日記に書かれている。

豪潮は「絵の仙崖、書の豪潮」と称せられた程の能筆家でもあった。

豪潮は芦屋に来たとき、海雲寺に宿したものと思われる。

この法篋印塔はもと旧芦屋小学校の敷地内にあつたのだが、明治三十四年芦屋高等小学校の改築が決まったとき、海雲寺と共に現在地に移されたのである。（芦屋町誌）

◎本堂 一

遠賀 川西四国第八十六番札所

本尊 毘沙門天

十一面観世音（実際は省略されて八面である）

※曼陀羅 一 狩野元信の作という。

※仁王像 彫刻 額 一 対 一

一枚の厚い板に彫り込まれた仁王像一対で、仏師雲慶の作といわれ頗る古雅なり。

◎高祖弘法大師坐像 一 昭和八年九月

明治三十六年川西四国創立三十周年記念

◎弘法大師立像 一 大正十年（一九二一）三月

◎地藏堂 一

遠賀 川西新西国第三十二番札所

本尊 地藏観世音菩薩

◎仏像群 一

北東側の土手に三段にわたり、約百体の仏像がある。

35

大塚古墳の石室 一 中ノ浜四一三

（説明板） （町指定有形文化財・考古資料）

この大塚古墳はもと大城おほじょうにあつたが、昭和十八年（一九四三）六月陸軍飛行場拡張工事の際発掘され、こゝに移し復元されたものである。この古墳は横穴式石室の円墳で、長さ南北三十六メートル、東西二十二メートル、高さ六メートルの盛土の中央に基底約三メートルの層土を底面として、砂層上に石室を営み、南方面に羨門を設け、玄室・副室及び前室の三室に区画されている。室内は床面から高さ約五十七厘の仕切石を使用し、奥壁にせい巾七十厘、側壁にせい巾四十厘に区画されている。天井石の上さらに高さ約二メートル、径約六メートルの積石が施され、円筒埴輪片が出土している。内部は久しい昔、盗賊に荒されたらしく貴重な物とて殆んどなく、石室内奥壁の区画からガラス製首飾、石蓋上から錆びた鉄刀側壁区画から錆びた短甲・鉄刀、玄門の外西方隅から金環一対・短甲・鉄刀が出土した。純金環・首飾・刀剣類・円筒埴輪の破片は芦屋町立歴史民俗資料館に展示してある。

※この古墳は千四百年前のこの地方の豪族の墳墓ではないかといわれている。発掘作業は当時の軍及び関係者の制約のもとに行なわれたので、状況の詳細は明確を欠ぐところが多いが、地元有志や安高團兵衛氏などの懇願により、大城よりこ

耕地整理 顕彰碑 一 中ノ浜一〇―五四

(芦屋中学校運動場西側隅)

昭和四十七年三月

へに移築復元されたのである。(芦屋町誌)
 ※ちなみに三里松原・鈴の松原・岡田宮跡・御手洗の池・
 官道御牧道・天狗の切松・船原等古来の名所旧蹟が数多くあつたが、旧日本陸軍がこの地に飛行場を建設するにあたり、これ等の史蹟や名勝は惜しくも姿を失ってしまった。(芦屋の葉)

明治三十九年から遠賀川改修工事が始められ、中流下流にわたつて川幅の大拡張が行なわれた。工事は大正期に入つても続けられたが、芦屋町は県から島門村広渡地区(現在遠賀町)の排土利用による耕地整理の施行をすゝめられた。芦屋町字柳ノ丸・実蒔・高浜全領域の民有地約二〇町歩は、砂質の畑地で生産力に乏しく、また土地の高低がひどい上に、各所に灌漑用の走りこみが散在していたので、雨期になると西川からの逆流で一面水びたしになるといふ状態だった。地形は乱雑で道路は曲りくねり、住宅地をつくるには不向な土地であつた。耕地整理はこの地域に施行されることになつた。耕地整理発起者として桑原伝次郎・小野貞次郎・塩田久次郎・吉永幸右衛門・長野佐二郎・太田玄太郎・松井重平の七名がえらばれた。運びこまれた土は高浜地区では厚さ約〇・六メートル、実蒔・柳ノ丸と西へ進むにつれて量は多く、柳ノ丸・大國主の碑南側では約七メートルに近い埋築が行なわれた。

(芦屋町誌)

旧芦屋尋常高等小学校 門 石柱

明治四十四年五月 芦屋中学校運動場東南側隅

この門柱はこゝに移設されているが、以前は芦屋橋つきあたり
 りに学校に上る石階段があり其の上にあつた。

学校名は時代により変つたが学校歴史の変遷を物語つてくれるようだ。こゝに学校名にまつわる事蹟を述べる。福岡県立芦屋中学校は明治十三年(一八八〇)に創設されたが同十八年廃校となつた。あとに公立瀬泳学校を開校したが、之も同十九年に閉校した。同年遠賀郡村立芦屋高等小学校を開設、同四十年に芦屋町立となる。船頭町にあつた芦屋尋常小学校は明治二十五年こゝに新築移転した。大正三年(一九一四)尋常・高等小学校は統合され芦屋尋常高等小学校と改称された。昭和十六年国民学校と改称、同二十二年芦屋小学校となる。同四十二年に白浜町の新校舎に移転した。その後この門柱は所在不明であつたが、どのようないきさつか吉田徳藏氏が寄贈建立された。

大國社跡 一(旧幸町) 白浜町四―二

桑原伝次郎の代に畑を耕作中、その地中より金の大黒様が出てきた。それを祭神として祭つたのがこの大國社である。

昭和五十四年に現地に再調査に行つた時にはあつたのだが、昭和五十五年にその前を通つた時には、あとかたもなく無くなつていた。現在は神武宮の境内にまとめて横倒しになつている。

岡湊神社の石の玉垣・大国社の鳥居・石碑その他神社の境内に移設してある庚申塚など元の所にあつてこそ歴史的な意義があると思う。このように現代の人の考えだけで無造作に位置を替えることは、造った人やこれ等を献納した人の善意にそむくことではないだろうか。我々旧蹟をたづね歩く者にとつては、その意義のうすれてゆくことに寂みしさを感ずるのである。今は児童公園になつていてあとかたもないが、以前に調べたのを記してなごりとする。

◎鳥居(大国社) | 明治二十一年(二八八八)五月

◎水盤 | 大正十一年(一九二二)二月

◎潮干石 | 明治廿一年(二八八八)八月

吉田 徳藏 中西 勘助

◎大國主大神 | 明治十八年(二八八五)七月

39

浜の地藏堂 | (旧幸町) 正門町一三一三

黒山カヲル(黒山高曆氏の母)さんがお四国参りをした際に、某所にあつたお地藏様が是非つれて行ってくれとのお告げがあつたので、背中に背負い芦屋につれ帰り、黒山家の邸内にある竹藪の中を切りひらいてそこに安置した。願いごとの御利益があらたかなので、お参りに来る者も多く今の地に移した。その時のお地藏様は石側の石祠の中に安置してある。

◎石祠 |

◎仏像 |

石祠の周囲に仏像が二十二体ある。これは四国八十八ヶ所になぞらえ、始め八十八体つくる予定であつたが、途中でだえそのまゝとなつた。

◎御堂 |

遠賀 川西四国奥之院

本尊 日切地藏菩薩

御堂の中の一室石側のお地藏様は、「かかえ地藏」といって願ひ事をした際、最初のあいだは重くて持ち上らないが、願ひ事がかなつたあかつきには軽々と持ち上るといふ。

◎弘法大師立像 | 昭和十二年(一九三七)十二月

黒山カヲル光生十三年忌建之

40

神武天皇社跡 | (旧幸町) 正門町一四一五

仲哀天皇

神功皇后

地理全誌に記せる如く、昔が原は古え岡田宮の趾なれば里民其徳を慕ひ奉りて、社殿を建て奉祀し、社殿も頗る宏壮なりしに、乱世に及びて度々兵火に罹り僅かに小祠のみ残り居りけるに、後世仏法盛んになり宮跡を寺とし齋庵寺と云う梵刹となし、境内に彼の小祠を移して若宮と崇めまつりけるを三百余年以前、寺を芦屋町内に移せるに因つて社をも移し奉るなり。然るに寺院の境内に奉祀するは恐れ多しとて、延享

二年（一七四五）当時本町の豪商俵屋こと吉永清三郎自ら多額の金員を密附して首唱者となり、行脚の僧帆牛ほんごうといえる者大に尽力し、町民と相謀り藩主黒田家に社地参千坪を乞い受けて、新に此の地に社を建てたり。爾後触宗社郡の祈願所となり、藩よりは普請の節は建設当時の例に任せ杉材を密附せられ、又毎年には浅川村より社前の門松二本竹四本を神納せらるゝを例とす。特に国主継高尊崇浅からず寛延三年（一七五〇）自ら参拝あり、宝暦四年（一七五四）郡米十二苞宛永代寄附の命あり。同十年（一七六〇）神田二反八畝歩を寄せられ、尋て齋隆齋清及び支封秋月藩主もまた参拝せらる。其の後文化八年（一八一七）十一月十八日齋清家老職吉田平兵衛をして代参せしめられたり。かく藩主代々尊崇あつかりき。故に王政の復古するに及び神武天皇の遥拜式を行はるゝに至り、福岡藩は権大属桑野弘人をして代拜せしめ、毎年三月十一日に祭祀局正権大属をして代拜せしむべき旨令達あり。是より先文化十四年（一八一七）八月十五日より二十日間、毎年農具市開設の儀を出願し允許を蒙むりしかば、同年より開始することゝ成りたるに其の賑いは年を追うて盛大となり、「神武市」の名は四方に喧伝せしかば近郡遠郷よりも群集しける。其の景況は筆紙に尽し難かりしに、惜い哉今は廃絶して名残りをだに止めず。（遠賀郡誌）

「神武天皇社」という社名は全国にも珍らしい社名である。

※吉永清三郎―吉永家は世々酒造を業とし、屋号を俵屋と称

えていた。享保十七年から寛政年間まで数十年間、公用銀の用達をはじめ郡中罹災者救恤のため浄財を投げだした。産子養育にも多額の米銀を献納した。神武天皇社の再興造営・浜崎の石波止築造などにも尽力した。

※神武社の農具市（神武市）

文化十四年（一八一七）には八月十五日から二十日間、毎年農具市をひらくことが許された。これは宝暦四年（一七五四）郡米十二俵の密附を受けるようになっていたのを、郡方仕組替えになつて十一俵召しあげられ一俵だけの神納になつたので「社格も相立ち難く」と文化十四年（一八一七）農具市の開催を願ひ出て許されたのである。社修復などの費用は市の益錢をもつて当てることにした。益錢は場錢としてではなく、すべて店々からの神納という形にして、いさゝかの神納もできない小店はその儀に及ばずということになつていた。八月十七日は神武社の平賀祭（正当の御祭礼）だから、市がひらかれることによつて祭りの気分はいつそう高まつた。各種の店・芝居・見世物などが出て近郷近在のものを集め、たいへんな賑わいであつた。凶作つづきのときは中止となつた。嘉永六年（一八五三）四月の「神武宮御祭礼農具市見世物類一切名元控帳」が残されている。大宮司黒山近江守から郡内大庄屋中へ出した案内状や、寺社役場への届書、また町役場から出された規定などもある。大庄屋中への案内状には「神武宮四月御祭礼好例の農具市ならびに通り掛り見世物、来る十七日から

おこなう故云々」と書かれている。文久三年（一八六三）四月の古文書もあるが、嘉永六年（一八五三）の「見世物類一切名元控帳」には出店・見世物・牛馬受持などが細かに記入されている。芝居も興業されていて、晴天十舞台、受持改方人も定められ、益金十兩のうち五兩は町役場納、五兩は大宮司納となっている。牛馬受持は芦屋村庄屋・組頭と嶋津・糠塚・若松・広渡・小島掛各村の者である。大城往還右の牛馬宿受持は幸町の大工であった。出店の種類は農具一切・桶類・白米・居酒屋・瀬戸物・金物・八百屋・酒肴・御堂物・墨筆・蠟燭・揚弓・小間物・茶店・まんじゅう・飴・菓子・餅など雑多である。髪結床や風呂なども出ているし、一寸男の見世物というのものもある。他郡他国からも牛馬市へ集まっていたので、町役場からは他方からの出店商人には深切にすること、津中（芦屋津）他方の出店とも安売りすること、出店・見世物小屋で喧嘩口論しないこと、また火の用心第一にして用水を備え置くこと、諸賭勝負は禁止といった規定が達せられている。近郷近在の老若男女は神武社の祭礼を楽しみ、また農具市・牛馬市には遠方から泊りがけでやって来ていた。

◎(左) 石 燈 籠 (式日献燈) | 嘉永二年(一八四九)五月

肥前伊万里陶器問屋中

伊万里世話人

石丸 源左衛門
横尾 武右衛門

田中 兵治

(芦屋町誌)

発起人
本岡 城太郎
小野 清次郎茂廣
柴田 清七朝光

高崎 徳右エ門義高
中西 次郎兵衛恒久
越野 三郎平守任

◎(右) 石 燈 籠 (式日献燈) |

町浦世話人 陶器旅行中

当町庄屋 江藤與四郎勝照

肥前伊万里幹事 二代 石丸 源左エ門

本岡 市太郎
本岡 佐吉
中西 卯右エ門
庄野 藤七
中西 清八

当町幹事

明治十一年(一八七八)六月修繕

昭和四十二年(一九六七)九月復元

この二基一対の石燈籠は基壇まで入れて、高さ五メートルにも及ぶ大きなものである。以前は幸町から栗屋に通じる旧街道筋(鈴の松原)の左側に建てられていたが、米軍進駐時代に倒されていた。それを昭和四十二年(一九六七)九月町有志により現在地に復元された。芦屋陶器商人と伊万里陶器問屋とが共同で献納したものである。芦屋陶器商人と伊万里陶器商人との関係は深かった。(芦屋町誌)

◎神 武 天 皇 聖 蹟 崗 水 門 顕 彰 碑 一
昭和十五年(一九四〇)十一月

(碑 文)

神武天皇甲寅年十一月舟師ヲ帥中テ筑紫國崗水門ニ至リ給
ヘリ聖蹟ハ此附近ナルベシ

※神武天皇御東遷のみぎりに、この芦屋の地に行在された
ことは、古事記や日本書紀に書かれている。この顕彰碑は
昭和十五年(一九四〇)国が皇紀二千六百年を記念して、帝
室史料編纂局を設置し、幾人かの歴史学者や考古学者が神
武天皇遺蹟を調査した結果、全国十九ヶ所の史蹟が指定さ
れ、その中の一つとして建立されたものである。(芦屋の葉)
◎幟 立 石 柱 一 明治三十四年(一九〇一)六月 市場町
◎県 社 神 武 天 皇 社 の 碑 一

大正十年(一九二一)七月

社司 黒山敏行 芦屋町長 下郡一成
社掌 林田頼威 委員長 桑原宗重
神社総代委員

松浦 藤石工門 石田 森松
吉永 虎之助 上田 房吉
中西 英敏 吉永 千三郎

◎鳥 居 (神武宮) 一 文化五年(一八〇八)三月

観音丸
掛屋 天満丸 乗組中
住吉丸

中西 次郎平満恒
越野 三郎平満久

◎幟 立 石 柱 一 萬延元年(一八六〇)八月 錢屋源次
◎神 武 天 皇 社 史 蹟 (及び御手洗池)の 説明板

神武天皇社は記紀にしろされているように、人皇第一代神
武天皇御東征の砌、一年御滞在になつた当地筑紫の岡田の
宮の聖蹟に建てられた神社で、その創建は古く由緒正しい
神社である。かつて宮域を去ること四丁ばかり西(現在自
衛隊基地内)芦屋浜の砂中より湧出する泉あり、里人呼び
て御手洗池と云う。其の水源微々たりといえども水勢の減
ずることなし。僅かに一丁にみたくして砂中に消尽す。是
往古神武天皇御東征の御時この水にて御手を洗い給い宗像
三神を遙拝し給う。其の後仲哀天皇・神功皇后も先例に従
わせ給うという。

神社は源平の戦の際(一一八三)兵火にかゝって焼失した。
御神体は境内にあつた小祠に安置されたが、それから五百
数十年間社殿を再建することが出来なかつた。漸く延享二
年(一七四五)芦屋の有志吉永清三郎氏の努力によつて、社
殿の再建をみるにいたり、代々藩主並に世人の崇敬をうけ
た。明治十四年一月村社に列せられ、大正十年福岡県々社
に昇格されたのであるが、昭和二十年五月十四日米軍の空
爆を受け社殿一切が壊滅した。御神体は幸に安泰で、芦屋
町内岡湊神社に奉安合祀して今日に及んでいる。
※余事なれど芦屋飛行場のことを

昭和十四年三里松原に日本陸軍飛行場が建設されることになり、昭和十七年に完成した。飛行戦闘隊がいて、これが実戦防空に出撃していた。航空基地内には九七式戦闘機を入れる掩体壕があちこちにあった。始めは滑走路が無く、草原を戦闘機が飛びたっていたが、同十八年の終りか十九年始めに、準戦闘機がきて始めて滑走路が出来た。十九年後半から米機の爆撃がひどくなったので、よく飛行機を正門（今の正門町のとこ）にあった掩体壕までひっぱって行ったものだった。B 29が大城の連根池に爆弾を落したり、神社に投下して社殿を焼いてしまった。（菅屋町誌）

◎盤 盤 | 慶応四年（一八六八）四月 本城触中

◎狗 犬 | 弘化四年（一八四七）八月

願主 江田 與平
世話人 辨天丸 兵助

甚三良

◎潮 干 石 | 文化九年（一八二二）春 松浦 藤右衛門

山 田 有 成 功 表 の 碑 | 菅屋小学校体育館前

明治四十四年（一九一〇）十月 有志・卒業生建之

遠賀町の人。明治二十二年菅屋尋常小学校第十三代校長となり、施設充実、教育の実践、出席率の向上に尽力し、県下の優秀校として「荏表旗」を県より受領した。菅屋尋常小学校が荏表旗をもらったのは、福岡県で荏表旗制度が設けられて第一回である。

42 岩 津 神 社 | (旧幸町) 白浜町七一五

祭 神 市杵嶋姫命

本社創立の起源を尋ねるに、寛保二年（一七四二）十一月菅屋町に大火あり、町の六、七部を蕩尽せり。因つて国主より罹災者一同へ多額の米銀等を救助せられけるも、何さま戸口多数の窮民を生じ凍餓に瀕する者少なからざれば、里老吉永清三郎（俵屋と号し酒造業を営む）大に之を憂い、国主へ銀百二十貫目を拝借し救済せんことを歎願に及びけるに国法に反るの故を以て容易に許容せられざりしも、清三郎身命を擲ち責任を負い誠意誠心一邑の回復を哀願しければ、郡奉行樋口種敏も遂に其の誠心に感じ、是亦身を以て尽力に及びけるより願意を採用せられたり。就ては其の返納の債務は清三郎魚はざる可らざるより、宗像郡沖津神社に立願し、鰻魚あらしめ玉わんことを只管に祈りしに、神明も其の誠心をや憐み玉いけん、翌年より鰻の大漁打続き、僅かに三年ならずして完納することを得たり。是偏に神明の擁護に依れるなりとて、報賽の意を以て本社を創建せし所以にして、これぞ実に延享二年（一七四五）七月なりき。爾来今日に至るまで町民の崇敬浅からず。九月十三日の例祭には宮座を行えり。従前神武宮の摂社なりしが今は独立の社となれり。里俗は御不言神社という。（沖ノ島を不言島と云う故なり）（遠賀郡誌）

◎玉 垣 | 大正十二年（一九二三）五月

塩田 利七 高崎 良之助 小山 梅吉

小山 與市 高崎 禎太郎 堀江 □之助

吉永 早太郎 福田 定吉 三浦 喜代松

長野 藤太郎 古□ 竹次郎 林 清次郎

貝掛 浪吉 藤□ 才吉 高崎 彦三郎

後藤 文次 桑原 市助 大竹 龜太郎

林 高三郎 竹尾 良平 井上 種吉

村田 綱吉 岡崎 七助 三浦 初太郎

岡崎 光太郎 横田 綱吉 安高 為吉

古賀 金十 小野 廣次郎

◎石燈

籠 一 弘化□年十一月 横田 喜平 中西 茂七

横田 貞右工門

庄野 藤七 本田 彦兵衛 高崎 利助

上野 助十 大竹 喜右工門 和田 半十

福田 貞次

◎鳥居

(岩津宮) 一 嘉永二年(一八四九)正月再建 桑原 傳次郎 江田 與平

塩屋 甚三郎 蛭子屋 儀助 万屋 武平

越野 三郎平 米屋 甚五郎 大黒屋 弥右工門

塩屋 喜右工門 掛屋 直助 尼崎屋 勘兵衛 河内屋 小兵衛

大坂生 蠟問屋 三河屋 金兵衛 石屋 勘兵衛 筑前屋 盤石工門

河内屋 佐兵衛 備中笠岡問屋 蛭子屋 源次郎

世話人 辨天丸 兵助

◎幟立

石柱 一 嘉永七年(一八五四)十一月 与七 惣市 仁一良 七次良, 貞十

又右工門 利七

◎水盤

一 明治百年祭(二九六七) 中ノ浜 横田 幸次 幸町 横田 貞吾

◎鳥居

一 安政六年(一八五九)四月 一 文久三年(一八六三)正月

◎狛犬

中西 善藏 高崎 儀助

◎社殿

一 客殿新築寄附者の石標 (岩津神社入口燈籠の右に三個あり)

神社 神社 田中 幾太郎

市場区 須佐政右工門 桑原定右工門

塩田 久右工門 永野 佐右工門 吉永 吉右工門

野口 又三郎 中西 市平 坂口 半七

永野 鎮一郎 守田 市郎 上田 善右工門

矢野 角平 守田 才太郎 小野 義松

中西 友吉 桑原 忠一 守田 孝七

世話人 松浦 藤右工門 桑原 嘉一郎

幸町区 松井 重平 永野 佐四郎

瀧口 源吾 横田 定助 上野 伊之助

竹屋 吉右工門 松井 次助 松井 藤右工門

井上 與七 大竹 傳右工門 村田 傳吉

上野	高崎	高崎	中西	栗山	林	芳賀	高崎	田中	中西	中西	本田	中西	坂尾	福田	高崎	上野	高崎	林	安高	長野	大竹	吉永	渡邊
助十	七三郎	良太郎	平太郎	栄藏	清作	種吉	伊六	善四郎	宗兵衛	卜毛	重藏	善三郎	傳次郎	次郎市	友吉	文十	源十	定五郎	彦次	新右工門	幸右工門	藤十	勝平
	東	小野	高崎	横田		吉永	宗岡	永野	川田	中西		前原	松井	横田	三浦	三浦		須佐	小山	渡辺	中西	須佐	
	辨藏	清八	岩太郎	藤助		半七	善兵卫	竹松	善七	善七郎		宗三郎	善四郎	熊吉	初吉	徳七		常吉	正右工門	勝三	藤太郎	作市	
秋枝	田中	石松	上野	四口	庄野	岡崎	横田	橋本	高崎	塩田	高崎	福田	高崎	高崎	水	福田	吉永	和	富永	吉永	吉永	和田	仲太郎
又イ	大吉	順太郎	助右工門	卯次郎	藤七	七三郎	幸兵卫	早雄	正次郎	弥吉	善藏	藤次郎	直八	文太郎	利右工門	長平	三石工門	伸太郎	長平	三石工門	三石工門	伸太郎	
	中ノ濱区	大竹喜由工門	世話係	石橋保作	太田卯平	中西勘助	小田綱吉	中西口太郎	船頭町区	吉浦長次郎	世話係	田中定吉	林中武平	阿部龜太郎	阿部伊之助	坂口九平	矢野正三郎	中ノ濱区	井上重助	寺尾善四郎	高崎藤一	柴田副吉	
刀根	矢野	丸岡	江藤	入江	井上	柳木傳右工門	中尾寛	小川	小西	江田	阿部	高松	梶山	田中	沢田	坂井政平	安高	中西	安高	直次郎	添田	菊十	
口平	清八	藤十	種吉	傳市	蝶四郎	池田	大庭	三好	佐七	甚助	重雄	忠吉	彦次郎	傳右工門	良太郎	直次郎	直次郎	光五郎	直次郎	直次郎	菊十	新宅	
蒲原	岩田	本松	上田	永田	喜十郎	池田	定次郎	三好	嘉七	穗坂	吉永	松本	江田	松井	吉田	吉田	太田	松尾	太田	定右工門	福松	小平	
芳太郎	武七	金七	喜次郎	喜十郎	喜三	池田	定次郎	嘉七	久兵衛	善藏	善藏	善藏	善藏	正平	徳造	徳造	福松	福松	福松	福松	福松	福松	福松

林田 吉景

世話係

中西

又七

大竹

傳五郎

東町区

倉垣

岩平

梅崎

善助

中西 嘉雄

柴田

逸郎

林田

近成

濱崎区

入江

惣口

中西

次郎

刀根 峯口

藤田

久平

中西

代造

中西 来助

中西

清八

(裏面に)

明治三十二年(一八九九)三月立之

幸町区世話係発起人名

松井 重平

長野

佐四郎

瀧口

源吾

横田 定助

井上

與七

大竹傳右工門

上野 武七

松井藤右工門

竹尾吉右工門

福田利右工門

林

定五郎

須佐 作市

渡邊

勝平

松井

次助

林田 傳吉

松井

善四郎

福田

次郎市

吉永 藤十

安高

彦次

小山正右工門

上野 文十

須佐源右工門

富永

長平

中西 善三郎

高崎

善藏

寺尾

善四郎

43

地敷神社 | (旧幸町) 白浜町七一五

(岩津神社の境内にあり)

祭神 伊邪那岐尊

以前は拜殿(入九尺九寸横十三尺)もあつたが、今は石祠のみ

にて建物は無い。里人は「ちぢく様」とも云う。

◎鳥居 (地敷神社) | 大正五年(一九一六)九月再建

塩田 久次郎

(裏側に) 天保十二年(一八四二)五月 幸町区中

吉永 扇之助

井上 為次郎

水上 文太郎

大竹 万太郎

寺尾 善四郎

田中 金次郎

横田 源太郎

松井 政太郎

村田 傳吉

長野 佐四郎

◎石祠 | 明治十二年(一八七九)四月石室再建

塩田 久次郎

◎鳥居 | 安政六年(一八五九)四月 魚屋伝次郎 外

(破損倒壊している)

44

白濱神社 | (旧幸町) 白浜町七一五

岩津神社境内にありて、伏見稻荷大明神を遷座す。

◎石燈籠 | (笠石なし) 明治三十四年(一九〇二)五月

江島 徳太郎

◎赤鳥居 (白浜稻荷大明神)(木製) |

◎石鳥居 (白浜神社) | 昭和五年(一九三〇)二月

福岡市東中洲 安部 寿一

同 実

◎水盤 | 明治三十三年(一九〇〇)七月 江島 徳太郎

◎稻荷像 (石造) | 昭和七年(一九三二)九月

45

- ◎潮井石 | 明治三十年(二八九七)八月 吉勸店
- ◎百度石 | 明治三十五年(一九〇二)五月
- ◎石碑 | 明治四十年(一九〇七)八月
- 官幣大社伏見稻荷神社大々祀式御神璽ヲ当社ニ奉安ス
- ◎社殿 |

芭蕉句碑 | (旧幸町) 白浜町七一五

明治二十五年(二八九二)十月十二日設立

(岩津神社境内にあり)

- (碑表) 花本太神
- (碑裏) 野を横に 馬飛貴無計よ 子規ほととぎ
- (基礎石に) 発起者 竹亭 野山
- いろは(二代目吐香)

アシヤ	如風	西ワカマツ	蒔花
アシヤ	瀧月	ハツ	湛水
ヤマガ	春霞	トギリ	梅雨
アシヤ	可笑	ヒロワタリ	柳川
ノリマツ	亀遊	アシヤ	扇寿
カモヲダ	藍水	全	岩石
アシヤ	梧楓	全	宣遊
クロ山	雨柳	全	撫石
アシヤ	魚泉		
アシヤ	竹葉		

仁川湊 岸原 佗太郎

全 ヨ シ

46

火切地蔵堂 | 幸町五一二四

右の句で馬飛貴無計よは馬うま曳ひき向むけよ
 ※この碑の表に花本太神とあるが、これは芭蕉の死後贈られ
 た称号である。

こゝの本尊は地藏菩薩で里人は火切地蔵と云い、火除ひよけのお
 地藏様として崇拜されている。浄土宗光明寺の再興をした僧
 重与師が大永元年(一五二二)に建立したもので元禄十年(一六
 九七)に再建。寛保二年(一七四二)十一月新町の大火(この火
 事は新町より出火し、船頭町の間二十四区民家六百余戸四百
 余棟を焼失した程の大火災で当時禅寿寺・海雲寺も全焼した
 の際に隣接地まで火炎につままれたが、この堂宇は難をまぬ
 がれたという。それから後は特に火難・延命・諸災難除けの
 地藏として祭られるようになった。文久三年(一八六三)に補
 修あり。

◎水盤 | 文久二年(一八六二)五月上旬

芳□ 惣蔵

◎道しるべ石 | 文久元年(一八六一)

十八榎角高さ五十二纏にて折れているので堂内に保管して
 ある。その一面には「新町」とあり、その左側の面には「
 濱口道はまぐちみち」一行をかえて「川筋道」と彫りこんである。旧町名
 の幸町しんまちも以前は新町と云っていたのだろう。旧町名
 芦屋町では道しるべ石として残っている珍しいものゝ一
 つである。

◎堂 宇 一

遠賀 川西四国第八十一番札所

本尊 千手観世音

47

筑前 齋屋 宿場 構口かまえぐちの跡の碑 一

(碑文)

幸町四十一

福岡藩の街道宿駅制度によると、筑前には六宿二十一宿が定められている。唐津街道中の芦屋は二十一宿の一つとして(水陸交通の要路であり船や人の往来が盛んであった)代官所、浦番所を置き、また旅籠屋・木賃宿・問屋場などができ、宿場町としても繁栄した。こゝに芦屋宿駅の構口を設け、行き交う旅人たちの看視の任にあつた。

※幕府は江戸を中心に東海道・中仙道・奥州街道・日光街道・甲州街道の五街道をととのえ、それを補う脇街道をもうけた。豊前小倉から肥前長崎にいたる長崎街道は脇街道である。筑前では六宿・二十一宿が定められた。黒崎・木屋瀬・飯塚・内野・山家・原田が六宿で、福岡・博多・箱崎・青柳・畦町・赤間・芦屋・若松・金出・宰府・二日市・甘木・志波・久喜宮・大隈・飯場・姪浜・今宿・前原・小石原・金武が二十一宿である。

主要な街道の両側には並木が植えられ、一里塚が立てられた。街道に沿って宿場町が発達し、多くの旅宿屋ができた。大名や幕吏の泊まる所が本陣であり、従者の泊まる所が脇本陣である。宿場には人足・駕籠・馬を用意して旅人の世話をする

48

大 国 座 跡 一 幸町九十一

問屋場があつた。飛脚屋もうまれた。

小倉から若松・芦屋・赤間・畦町・青柳・箱崎を経て博多・福岡へ出、姪浜・今宿・前原を通過して深江にいたる街道は、唐津街道と呼ばれていた。

芦屋には旅籠屋(平旅籠・飯盛旅籠)木賃宿も多かったと思われる。定まった本陣はなかったが、藩主や幕吏は門閥家である大庄屋または豪商の家に泊まっていた。(芦屋町誌)

◎猿 田 彦 太 神 一 明治二十五年(一八九二)三月再建
◎大 乘 妙 典 一 字 一 石 の 塔 一

弘化二年(一八四五)五月 中西善藏

明治三十二年(一八九九)五月、芦屋町の桑原永次郎・中西清八・吉田徳蔵の三名が建設発起人になって、趣意書をつくり大國座建設の賛成者を募った。小野貞次郎・小曾我清次郎ら十八名の賛成者を得たので、合資会社として資本金七〇〇〇円(二株五十円・一四〇株)で建設計画をすすめることにし、県に出願した。建設予定地とされた芦屋町幸町の土地買収がおこなわれ、劇場の構造については京都の南座を参考にしたりという意見もあつたが、結局熊本の本東雲座(明治二十一年開場)を視察に行つて、それと同じ規模のものを建てることにした。十二月下旬県から設立許可が下つたので、工事にかゝり同三十三年春上棟式を行った。八月二十一日県から定劇場としての設置許可が下りた。落成したのは九月下旬である。

劇場の運営は株式会社組織によることにし、桑原永次郎・中西清八・吉田徳藏・塩田猪平・小曾我清次郎・小野貞次郎・位地正次郎の七名が発起人となって、ひろく株式を募集した。「株式会社大國座」が設立されたのは九月二十日である。資本総額一万五千元（一株五十円・三〇〇株、翌年四〇株増資）株主総数二十五名であった。桑原・中西・吉田の三名が取締役、塩田と小野が監査役に就任した。

大國座は敷地面積一九〇七四平方メートル、建物面積（階下）九四七・一平方メートルで、観客定員は階下五六〇名、階上二六〇名、計八二〇名だったが、階上には立見席もつくられ収容人員は一〇〇〇名をこえたという。廻り舞台・花道・楽屋・役者宿室・中茶屋・売店・表木戸・下足場など完備した本格的な劇場であった。定劇場としての使用が認められたのは明治三十三年（一九〇〇）十月三日である。コケラ落しには東京歌舞伎の市川市十郎一座をよんだという。以後東京・関西歌舞伎・川上音二郎一座・松井須磨子一座・五月信子一座をはじめ中央・地方劇団の公演がさかに行われた。浪曲・奇術・筑前琵琶などの公演もあり、また大正期には映写設備も設けられ、当時「活動写真」と呼ばれていた映画も上映された。映画と芝居とを組み合わせた連鎖劇が人気を呼んでいたという。

俳優は劇場裏手の上下二〇室ほどあった割部屋に泊っていたが特別な名優は山香屋（市場町）藤屋（中ノ浜）米喜（金屋）旅館

などに宿泊し、食事は穂坂・田清などの料亭でとっていたという。役者の顔見世には人力車数十台をつらね、幟を立て鳴物入りで町廻りをしたから、賑やかなものであった。開演はたいてい午前十時ころからで観客は遠賀・垣・中間・島郷あたりから弁当持参でやって来ていた。

大國座は明治・大正・昭和を通じて地方民衆の重要な娯楽施設だったが、昭和十九年（一九四四）三月十二日夜、火災によって焼失してしまった。広沢虎造の浪曲公演中のことだった。その後長野政八の出資によって大國座が再建されたのは昭和二十三年（一九四八）三月である。二階建てだったが規模は小さく、建坪は階下八一四・二六平方メートル、観客定員は五〇〇名だった。引きつづき芝居や映画が興行されていたが、昭和四十一年（一九六六）八月芦屋町は敷地と共に大國座を買い受け、これを解体した。（芦屋町誌）
現在その一部に幸町公民館が建ち、残りは幸町児童公園となっている。

49

遠賀郡役所跡の碑（旧市場町）

西浜町一―一五

（碑文）

明治六年（一八七三）こゝに遠賀郡猶調所が設置され、同九年三藩県・福岡県・小倉県の三県合併後福岡県となり、大区改正に伴ない、明治十一年十月猶調所は遠賀郡役所と改称され

た。その行政管内は現在の遠賀郡は勿論のこと、中間・八幡・戸畑・若松等を包含する広い地域であった。同三十一年二月折尾に移転するまで二十五年間この地に於て地方行政を行つた。

50

横町の地蔵堂 | (旧浜崎) 西浜町一三一四

◎水盤 | 大正四年(一九一五)六月

世話人 吉永 昶之助 篠原 弥市 長野 六太郎

大夫 元 小寺 秀造

尾上多見太郎 嵐 岡十郎 嵐 璃左エ門

嵐 光十郎 沢村 千鶴 鶴澤 清糸

竹本鱗玉大夫

大國座に來演した役者たちが連名でこの水盤をあげている。役者が連名で献納したものが残っているのは町内でこれ一つである。

◎三界萬靈の碑 | 文化九年(一八二二)七月

◎堂宇 |

遠賀 川西四国奥之院

本尊 横町地藏尊

常陸丸殉難勇士之碑 | (旧浜崎)

幸町九一五三(浜崎海岸)

昭和十八年(一九四三)六月十五日建之 芦屋町先賢顕彰会

世話人	長野 政八	堀江 幸太郎
縄田 高次郎	中西 仙藏	中西 武平
中西 儀七郎	中西 芳太郎	中村 邦平
中村 建二	瓜生 天全	井地 鹿之助
倉垣 茂雄	松野 信太郎	小南 種男
秋山 光清	安高 團兵衛	重岡 本芳

明治三十七年(一九〇四)六月十四日宇品を出港して同夜崎沖に仮泊した常陸丸(六、一七五トン)は、翌十五日玄海灘に出、僚船佐渡丸と共に南鮮へ向った。日露戦争がはじまってから四ヶ月後のことである。常陸丸の乗組員は監督官村上弥四郎(海軍中佐)船長キャンベル(英人)ほか船員一三二名、輸送部隊は近衛後備歩兵第一連隊本部と第二大隊(第八中隊欠)それと第一〇師団の糧食縦列の将兵計一〇九五名である。ほかに馬匹三二〇頭と重要器材が積まれていた。輸送指揮官は歩兵第一連隊長須知源次郎中佐(四十五歳)であった。六月十五日午前十時ごろ、常陸丸は沖ノ島の南西七、八里の沖合で、ウラジオ艦隊の巡洋艦クロンボイ・ロシア・リュウリックの三隻におそわれた。至近距離からの猛砲撃を受けて機関部をやられ、航行不能におちいってしまった。輸送船のみなさこちらには小銃があるだけで応戦する砲はない。死傷者が続出した須知中佐は軍旗を焼き重要書類を処置して自刃した。将校の多くは自決した。兵員の中にはこれにならうものもあり、また海中へ身を投じるものもあった。露艦の攻撃はつづけら

れ、ついに火を発した常陸丸は午後三時ごろ海中へ没した。生存者はわずか一〇〇余名にすぎなかった。佐渡丸も魚雷、砲撃を受け死傷者を多数出したが、沈没だけはまぬがれた。当時芦屋から島郷の海岸一帯に、常陸丸の食料・カンツメ類がたぐさん流れ寄って来たそうである。芦屋町仏教会では浜崎海岸に大卒塔婆を立て、殉難者を追悼慰霊することを協議し、金台寺住職本郷真照を先達にして、広く浄財あつめの托鉢をおこなった。町の有志も協力した。遭難の日から二十一日目の七月五日、玄海灘をのぞむ浜崎海岸にたてられた大卒塔婆の前に、全町の寺僧、町長石川重雄ほか官民有志・赤字社員・学校生徒など多数参集して常陸丸・佐渡丸の殉難者を弔う大法会がいとなまれた。石川町長・本郷真照らが弔辞や表白文をさへげた。法会の大卒塔婆のちに近くの立江地藏尊の後ろにうつされ、地元の人たちによつて年々供養が行われていたが、長い歲月のうち風雨にさらされ、原形をとどめぬほどに朽ちはててしまつた。

昭和十七年（一九四二）町長長野政八を会長として、芦屋町先賢顕彰会が発足した。顕彰会では第一次事業として浜崎海岸に常陸丸殉難勇士之碑を建立することを決め計画を進めた。碑文は若松市乙丸出身で芦屋高等小学校に学んだ陸軍中將松井太久郎に依頼した。碑が竣工して碑前で慰霊祭が行われたのは昭和十八年六月十五日である。碑の表面には尾野陸軍大將の筆になる「常陸丸殉難勇士之碑」の九文字がきざまれ、裏面には須知中佐以下の壮烈さをたゞえる松井中將の碑文が彫

りこまれている。

芦屋町先賢顕彰会では引きつづき毎年慰霊祭を行っていたが昭和二十年八月日本敗戦後、米軍が芦屋町に進駐してきたので碑前の慰霊祭は中止され、毎年光明寺で行われる先賢慰霊祭に含ませて執行されてきた。米軍が芦屋町から撤退したのは昭和三十五年である。

昭和三十九年（一九六四）六月十五日芦屋町先賢顕彰会では、浜崎の碑前で常陸丸遭難六十周年の盛大な供養慰霊祭を執行した。東京から須知中佐の孫にあたる須知正和（東京都常陸丸殉難遺族会々長）がわざわざ出席して挨拶をし碑前に祭詞をさへげた。（芦屋町誌）

52

芦屋御台場の跡——（旧幸町）常陸丸の碑裏側

望玄荘団地北側の裏から芦屋町立病院にかけて小高い丘があった。この丘が芦屋御台場の跡で明治の末までは御台場の石垣が残っていた。（刀根房吉氏談、八十一歳）

※福岡藩では洞海湾沿岸の若松・小石・藤ノ木・二島・本城・黒崎・枝光また戸畑・中原海岸に藩上を配置して、外艦の襲来を警戒させた。遠賀郡には土族隊長として家老野村益雄が本城に駐在し、若松地方は吉田主馬が主將として若松に駐在した。若松・芦屋・柏原には御台場が構築された。台場づくりには一般農民が動員された。博多湾周辺の須崎・波奈・残ノ島・志賀島・西戸崎にも台場がつくられた。国内一般から

燭台・金だらい・鏡その他銅器などが献納され、一〇〇余門の大砲が鑄造されたという。「福岡年代記」によると「文久三年（一八六二）六月朔日若松浦中島砲台築立七月成就」とあるから芦屋・柏原の台場も短期間に造られたものと思われる。

芦屋・柏原・若松地方では農民が徴用され、農兵として交替で日夜台場に詰め、大砲の射ち方を練習させられた。町人で大砲打方に召されたものもあつた。吉田主馬の支配下にあつて郷筒方（大砲方）を勤めていた者たちは、足輕にとり立てられ、年々米三俵づつ支給されていた。各台場は福岡藩の防備施設として明治初年まで残されていた。

※芦屋町幸町には構口という地名があつたといわれているが、それは海岸の台場へ通じる道路の角に詰所があり、そこに藩士その他当直者が詰めていたからだろう。（芦屋町誌）

53

立地蔵 一（旧浜崎）西浜町一三一五

むかし芦屋浜に水死体があがつた。見れば大金のはいつた財布が首にかけてある。里人がこれを取ろうとすると、死んでいるはずなのに、眼をパッチリと開いて恨めしそうに見える。里人たちは光明寺にお願いしてそのお金で供養をし埋葬した。残りのお金でこのお地蔵様をつくりここに建て、漁夫の海上安全を祈ると共に、毎年七月八日の御座を設け百万遍の念仏講を行い遭難者の供養をしている。

◎立江地蔵立像 一

遠賀 川西四国奥之院

◎南無阿彌陀佛の碑 一

天保五年（一八三四）六月 当浦中

漁夫の海上安全と水死者の供養を祈願して、浜崎浦の人達によつて建てられたものである。

54

焚火神社 一（旧浜崎）西浜町一―一二五

火除けの神また子供の守護神として崇敬され、里人は権現さまともいっている。

「焚火神社」と書いてある奉納額は市場町の柴田助次（亀吉）の掲げたものである。

◎職立石柱 一 元治二年（一八六五）六月

◎潮井石 一 慶応二年（一八六六）十一月

是從百渡 福嶋屋勘七

◎社殿 一

55

閻魔堂 一（旧浜崎）西浜町二―二二四

浄土宗光明寺所属。寛政年中海上安全のために祭る。浜崎漁民の信仰あつく、毎月十六日に念仏講を行なう。

本尊 閻魔大王（坐像・木像）

◎門柱 一 大正十二年（一九二三）十二月 縄田 佐平

◎弘法大師立像 一 大正十二年（一九二三）三月

◎堂宇（石） 一

閻魔大王を祭り、地獄極楽の大掛軸が保管されている。

◎堂 宇(左) |

四国八十八ヶ所第二十番札所鶴林寺の本札がある。

遠賀 川西四国第八十二番札所

本尊 千手観世音

(正面高段に)

◎波 切不動明王 大正十二年(一九二二)八月

◎十三 仏 (共に) 吉田 磯吉

◎毘 沙門天王 藤田 清太郎

56

惠 比須神社 | (旧浜崎) 西浜町一―三五

祭神 事代主神

太宰管内誌にも記載があり、古くから浜崎漁民・伊万里焼商人たちが、大漁や海上安全を祈願している。

◎織 立石柱 | 明治二十年(一八八七)

昭和二十二年(一九四七)七月再建

当浦安全 海上安全 浜崎青年会

中西 徳七 中西 善助 刀根 栄七

柴田吉兵衛 井上 甚三 中西 真吉

中西 竹松

◎鳥 居(惠比須社) | 寛延三年(一七五〇)二月

◎水 盤 | 昭和八年(一九三三)四月

◎潮 井石 | 昭和八年(一九三三)五月

◎社 殿 |

蛭子神社

天照皇大神宮

事代主神社

◎稻 荷神社(木祠)

祭神 倉稻魂神

◎金 比羅宮(石祠) | 天保十年(一八三九)

桑原 伝次郎

源 徳

◎白 峰神社(木祠) | 今は朽ちて無し

祭神 崇徳天皇・葦原醜男神

◎大 黒立像 | 文政二年(一八一九)十一月

掛屋 観音丸 天満丸 住吉丸 乗組中

◎猿 田彦大神 | 安政六年(一八五九)正月

焚火神社の前の道路向いにあつたものなれど、民家を新築

するのでこゝに移した。

◎龍 神様(木祠) |

一・五・九月、年に三回龍神祭が行われていた。

◎石 燈籠(一基) | 弘化三年(一八四六)正月

海上安全 商賈永統 掛屋船乗組中

明治三十八年(一九〇五)六月修繕 中西次郎平恒直

57

猪 春大明神 | (旧浜崎) 西浜町一六―一四

◎鳥 居(正一位猪春大明神)(木製) |

◎石 燈籠 一 寛政十一年(一七九九)七月

吉のや天神丸 若松や大黒丸
中はや榮徳丸 かけや観音丸
かけや天満丸 志をや灘吉丸

◎石 祠 一
◎庚 申 尊 天 一 寛政六年(一七九四)二月

58

浜崎浦の石波止 一 (旧浜崎)

此所往昔冬に至れば毎年西北の風烈しく、海中の土砂を吹上げ洲口を吹き埋めける故、年を追うて河口浅くなり、船舶の碇泊も困難となれり。仍て延享二年(一七四五)芦屋の富豪俵屋清三郎(吉永氏)私財を以て同年八月新に石波止築造の工を起し、同五年に至り竣工を告げたり。其の長さ六十間築留三間。これより後暫く風浪の患い無く、津中の生業漸く昔に復しけるに、幾程なく又荒浪の為に崩壊せられ、久しく修繕する人もなかりしかば、津中も次第に枯れゆくまゝに、斯ては津中の衰頹いかんの点に達せんも計り難しとて、津中協議の上、古波止を根拠として再び石垣を築きて堤上に松を植え、風浪を防ぐの謀をなせり。東西長さ七十六間幅敷六間天端二間なりき。此の波止明治十二年(一八七九)の頃に破壊し明治二十四年の大洪水にて大破損を来せしかば、西風の為め海中の白砂湊内に浸入し、山鹿浦の海岸に高洲を生じ漸次に上り渡場をも埋めんとし、芦屋の浜崎下も同じく洲を生じ、両郷

間僅かに数間となれり。其の後県会の決議により破壊せる波止を修築せしより、やゝ復旧して目下の景況とはなれり。

(遠賀郡誌)

59

速瀬神社 一 浜崎石波止の上
◎石 祠 一

祭神 速秋津姫命 瀬織津姫命

此の祠、明治七年(一八七四)六月一日夜間に三尺許り側に倒れたり、されども少しも破損せず。其の頃浦内漁魚少く又種々奇異の事ありければ、恐れて其の由をといけるに、汚穢の事ありて神の祟りあるなりと云う。因つて探索せしに近來古き位牌を多く杜側の海濱に捨てたり。其の故なるべしとて、不浄の物を取除け浄めのお抜いをして七月に祠を改め建つという。(遠賀郡誌)

60

横ノ丁地蔵堂 一 (旧浜崎) 西浜町一七一

里人は「かけばたのお地藏様」といつている。

遠賀 川西四国奥之院

本尊 鶴ヶ岡延命地藏菩薩

61

光明寺 一 (旧市場町) 西浜町一一四

悟真山と号す。浄土宗鎮西派本山西京智恩院に属して中本山たり。嘉禎元年(一一三五)聖光上人の弟子良忠(一書には然阿

とある)矢矧川の東に建立せり。其の後大永元年(二五二)重
 誉と云う僧(鞍手郡植木村の産)今の地に再興せり。本尊阿弥
 陀仏(立像高さ三尺一寸)恵心僧都の作と云う。辺鄙には頗る
 壯麗の寺なり。末寺四、吉木三福寺・底井野西光寺・乙丸真
 龍寺・芦屋安長寺なり。(遠賀郡誌)

◎殺生禁断の碑 |

◎総門 |

(左側に)

◎鐘楼 |

元禄三年(二六九〇)六月に鑄造した洪鐘一口、もと千光院
 にありたるもの、明治三年の神仏判然令により光明寺に移
 設されたが、惜むらくは戦時中献納して今その物はない。

これには施主長野太郎左衛門重利・太田喜兵衛演近・篠原
 新八正勝と銘がはいっていた。(芦屋町誌)

(右側に)

◎千々和由太翁の句碑 |

明治二年(二八六九) 門人一同

片と比ら 立し関家や 秋の暮

表に往来菴怡翁由太居士とあるように、もともとは墓碑と
 して建てられたものであるが、碑の下に遺骨はない。若松
 区弘川にあつたものだが、千々和家の遺骨を光明寺の納骨
 堂に納めたとき、折角門人たちが建立してくれたこの墓碑
 を句碑として弘川より光明寺の境内に移設したものである。

※千々和由太

名は俊、字は好琢、往来庵と称す。幕末底井野村より弘川
 に来り、医を業とし、傍ら詩歌・俳諧をよくし、同好者を
 集めて教授せり。由太は亀井南冥の門に入り、和歌は伊藤
 常足に師事す。慶応三年(二八六七)正月二日七十八歳で没
 す。明治二年(二八六九)に門人相謀り墓碑を弘川墓地に建
 て、翁の句を刻む。

片扉 立し関家や 秋の暮

(若松市誌)

◎圓光大師坐像 |

◎宝篋印塔 | 天保二年(二八三一)八月 和田伊六

◎法然上人 七百五十年大遠忌記念碑 |

昭和三十五年(二九六〇)四月

◎仏像(三十三体) |

遠賀 川西四国第八十三番札所

本尊 正観世音菩薩

(正面に)

◎大銀杏 | 樹齡は四百年以上という。

◎水盤 | 安政六年(二八五九)正月 江田 與兵衛

◎石燈籠(智恵光) | 明治十六年(二八八三)十二月

高崎 清市 吉永幸右エ門

山下 利助 中西 吉兵衛

◎本堂 |

額「悟真山」は智恩院大僧正筆

大 壁 画 一 丹生忍冬斎筆になる本堂一杯の壁画で二

十五菩薩来迎図・天人・蓮華図・山越阿弥陀その他で数ヶ月をかけてえがかれたものである。ちなみに先生は現在大分県安心院に居られる。

◎宝 物 殿 一 本堂の裏に建設中である。

◎一 字 一 石 大 乘 妙 典 一

明治十三年(一八八〇)二月 吉永 市良助

◎一 字 一 石 大 乘 妙 典 一

宝暦四年(一七五四)七月 芳永 幸重郎

◎仏 像(地藏学) 一

安政六年(一八五九)七月 坂口 平四郎

江田 與平

(裏の墓地に)

◎舟 形 の 墓 碑 一 寛文八年(一六六八)霜月

梅香院殿光譽妙清法尼とある。芦屋町で院殿号が付いている戒名は珍しい、どなたの墓であろうか。

◎立 地 蔵 一

◎宝 篋 印 塔 (三部妙典) 一 文政八年(一八二五)春

刀根 七兵衛恭通七十歳賀

周防室津 石工 磯邊屋 弥兵衛

◎一 字 一 石 一 天保六年(一八三五)正月

源空庵主 刀根 七兵衛恭通

※光明寺の過去帳から

薩摩藩士田中彦七の法名が発見された。それによると

元治二年(一八六五)正月五日

源 道 軒 俊 国 淨 傑 居 士

薩州ノ士 田 中 彦 七

と記載されている。

墓は浜崎墓地(常陸丸殉難勇士之碑の左側の小路を入る)にある。

薩 藩 士 田 中 彦 七 君 墳 墓 目 標

明治三十七年(一九〇四) 同郷 有川貞寿建之

※元治元年(一八六四)十一月五日幕府の長州討伐の命を受け薩摩軍約三千人が海路芦屋に入港し観音寺に本陣を構え、町内の寺、神社、民家などに宿陣を張っている。この芦屋宿陣中、薩藩士数人が病死していることが寺の過去帳にも残されている。長州征伐が解決したのは同年十二月二十七日であった。西郷隆盛は翌年の一月一日小倉、芦屋に来て徹兵を伝達している。約二ヶ月間芦屋で宿陣していた兵士達は一月四日陸路帰路につく。この田中彦七は病気のため徹兵員に加わることができず死んでいる。それは徹取の翌日である。

(崗七号 藤本春秋子)

※ちなみに観音寺の過去帳には芦屋の陣營で病没した薩摩藩士二名の氏名・戒名が記されている。

一、 蒲地袖蔵(薩州島津登組下)

文久三年(一八六三)十二月七日

功岳宗成居士

長州御追討之節、当所ニ薩州公御陣營中、宿浜崎

南光院ニテ病死被致候事

二、田尻嘉兵衛(薩州家臣)

元治二年一慶応元年改(一八六五)正月三日

鉄岩紹岫居士 行年二十九才

長州御征伐戦士之蒙命出軍、於当邑宿陣病死

(芦屋町誌)

62

蘆屋警察署跡の碑

一(旧市場町) 西浜町五一一六

(碑文)

明治八年(一八七五)福岡県第五大区芦屋警察掛巡視所としてこの地に設置さる。同十年芦屋警察署と改称し、のちに分署を若松・黒崎・赤間に置く。(当時県下では福岡・久留米・柳川・甘木・八屋・飯塚・小倉と芦屋の八署)時代の變遷に伴い、明治二十二年若松に移り芦屋はその分署となる。

※巡查がサーベルをさけるようになったのは、明治十五年からである。それまでは棒を持って巡らしていた。

63

戎神社 一(旧市場町) 西浜町一一七

◎玉垣 一 嘉永三年(一八五〇)

桑原 傳次郎 江藤 與四郎 江藤 與五郎

◎鳥居 一 弘化三年(一八四六)六月

64

観音寺 一(旧中小路) 西浜町三一三五

◎社殿 一

◎大黒立像 一 市場町内中

桑原 傳次郎宗昌 小野 勘右衛門茂廣
桑原 勘兵衛秀遠 小野 傳右衛門登重

潮音山と号す。禅宗臨濟派中本山博多崇福寺末なり。開山は錦溪守文禪師にして、至徳二年(一三八五)の創建なりと云う。此の寺以前は蘆屋寺とて昔ヶ原に在りしを三百余年以前今の地に移せるなり。本尊は観世音なり(坐像高さ二尺)。応永元年(一三九四)の春、芦屋浦の漁夫刀根四郎と云う者、潮入川の中央にて網を下しける折柄、地風烈しくなり網の内凄しかりしかば怪しみ居たる折柄、木片の網に掛りけるを引揚げ見れば、観音の像なりしにより持ち帰りて尊崇し居たりしを、後当寺に安置せりといえり。此の時より観音寺と改めたり。今の本尊是なり。其の胎中に観音の黄金の小像ありしと云う。是即ち刀根四郎が取揚げし像なりと云う。この金像今は無し。当国三十三所第二十二番の巡拝所なり。古え昔ヶ原に在りし時は、七堂伽藍悉く備わり塔頭十二寺ありしとかや。今は悉く廢して延命寺・萬福寺・慈眼寺等の名のみ伝われり。

(遠賀郡誌)

※鎌倉時代に禅宗が新に宗から我が国に伝わって、道隆(大覚禪師)元庵(元庵)祖元(仏光国師)らの名僧が来朝し諸大寺が建てられ

宗勢頗る盛んであったが本朝高僧伝には、この大覚禪師が寛元四年(一一四六)―至徳の約百四十年前―太宰府へ来朝した当時既に芦屋寺は存在していたことが明記してあるので、開山は至徳二年より以前であったと考えられる。是によると守文禪師は中興の開山ならんと。(芦屋の葉)

◎因 中 廿 二 番 札 所 の 石 標 一 梅崎 善六 友

明治廿四年(一八九二)九月

◎御 国 中 二 十 二 番 小 八 ん を ん 寺 一 妻 友

天保六年(一八三五)二月

◎石 門 柱 一 大正三年(一九一四)三月 井地 太郎 上田 房吉 妹尾 秀二

◎総 門 一 潮音山の額あり。無準禪師の筆なりと云う。

黒田長政の建立にして、元禄年中光之の再建なり。

◎鐘 楼 一 孝 行 地 蔵 大 菩 薩 一 昭和七年(一九三二)五月 在奉天 大竹 孝助

◎石 燈 籠 (左) 一 明治四十三年(一九一〇)十月 中西 又七

石 燈 籠 (右) 一 明治十四年(一八八一)六月

江田 傳七 林 武平妻 吉田 伊右エ門妻
梅崎 善六妻 副田 彦兵エ母

◎水 盤 一 弘化二年(一八四五)十一月 横田 儀四郎
◎本 堂 石 段 一 天保十二年(一八四二)六月 桑原 新次郎

◎本 堂 一 遠賀 川西四国第八十四番札所

本尊 千手観世音

※羅 漢 像 (木彫) 一 山崎朝雲作の彫刻で、原木は「たも」一木作りで印度の修業僧(羅漢様)が刻んである。大正十年(一九二二)帝展に出品したものである。山崎朝雲氏より大音氏に贈られたものであるが、船頭町大火の折、大音氏より難をのがれ今はこの寺内に安置されている。

※山崎鉄舟の守り本尊十一面観世音菩薩像とそれに附随した対幅がある。

65

日 蓮 宗 芦 屋 教 会 所 一 (旧中小路) 幸町三十五

芦屋歌舞伎役者尾上菊枝(辰五郎)は熱心な日蓮宗の信者で、芦屋に日蓮宗の教会所を建てるため、信者達と毎年の寒行にリンをチーンチーンと鳴らしながら、町内を隅から隅まで廻った。菊枝の舞台で鍛えた名調子のお経を誰もが聞き惚れたという。町の人達は菊っさんが廻って来るのを待ってお賽銭をあげるの、いつも信者の一団からはるかに遅れていた。菊枝が念願していた芦屋教会所は大正十年(一九二二)に建つ

たが、菊つあんは開堂式を待たずその前年に六十三歳で亡くなった。(芦屋町誌)

墓は鶴松墓苑にある。芦屋役者最後期の人である。

◎法華塔 — 天明四年(一七八四)八月

これは天明の大飢饉のとき、餓死したものの、供養のために建てられたものと思われる。施主の名は無い。山鹿城山の下権現堂鼻にあつたのだが、昭和二十七年芦屋町堂競艇場が建設されることになつたので、前年の二十六年に現在地に移された。(芦屋町誌)

◎本堂 —

金台寺 — (旧中小路) 西浜町一—二二

海雲山と号す。時宗遊行派本山相模国藤沢山清浄光寺末なり。寺伝に応安元年(二三六八)一遍上人より第七世像阿上人(上総国久野村の産)開基すと云う。本尊彌陀三尊の像は安阿彌が作と云う。当寺は山鹿麻生氏代々の菩提所にて、古えは寺領も教多くありしとかや。この寺は垂間野橋の上であり。因つて垂間道場といえり。古き文書には山鹿の金胎寺ともあり、芦屋も昔は山鹿の庄の内なりし故かく云うなり。(遠賀郡誌)

※大同元年(二四六六)唐土より帰朝した空海は、諸国を遍歴して所々に寺を建てたといわれるが、金台寺もまた空海の開基したものという説もある。(芦屋の葉)

◎遊行上人様足洗いの石 —

遊行上人が金台寺に来られたとき、寺の門をはいる前に、旅によごれた足をすすぎ洗いたした台石が、この石であるといふ伝えられている。

※江戸時代隠目付と云われた遊行上人は、諸国を巡行して、諸藩の政治を批判する権限を與えられていたので、各藩とも上人が巡行して来るといふ知らせを受けると、諸侯は大変なもてなし方で、上人を迎えたものである。こうした地位と名譽と権限を有していた上人も、九州入りの際には必らず此の金台寺に宿泊するのを常としていた。金台寺はそれほど由緒ある古刹であつた。

今の金台小路は上人が金台寺に宿泊する時、伴人達が多人數泊る宿舍のあつた所だといわれている。(芦屋の葉)

※遊行上人というのは、時宗の開祖一遍に名づけられた名称である。一遍以後、時宗の僧侶は一遍と同じように日本全国を巡り歩いて念仏弘通につとめたので、遊行上人と呼ばれた。元禄七年(一六九四)にも遊行上人(四十三世)は筑前に下向しているし、また安永二年(一七七三)の藩記録にもあるが、芦屋金台寺には延享三年(二七四六)が初の下向滞在であつた。延享三年遊行上人が滞在したときの文書が残されている。わずか一日間ほどの滞在ながら受入れ準備、接待、送迎などに、福岡藩当局がいかに細く心をくばつたかがくわしく記されている。当時の金台寺住職は覚阿であつた。延享二年八月覚阿は藩庁に呼び出され、寺社奉行四宮甚太夫から明春遊行

上人が下向して来ることを知らされた。覚阿は博多の弥名寺（住職相阿）と連絡して受入準備にかゝった。弥名寺は金台寺の本寺である。藩では遊行上人掛りとして、御用聞衆喜多村安右衛門・御在用方石川源次・関屋六兵衛の三名ほかに脇役四名を定めた。遊行上人（本山五十一代賦存大上人）は石州益田に滞在中なので、覚阿は相阿と連名の手紙を出した。十一月には益田から遊行上人の連絡の使者が来た。覚阿は藩庁に願ひ出て路銀として銀十枚を下げ渡され、十二月十七日石州益田へ旅立った。十二月二十七日には普請奉行林七郎右衛門が、手附・大工棟梁をつれて芦屋に出張し、普請の打合せをした。芦屋の代官は権藤伊右衛門であった。延享三年一月七日喜多村安右衛門が相阿と同道して金台寺の見分に来た。光明寺の靈誉と代官権藤とが立合った。覚阿が石州から帰寺したのは一月十五日である。十七日から賄所その他の普請がはじまった。芦屋・山鹿の大工二〇名が上人の居間などの建築にあたった。建築用材木は高倉村百合野山、天井板は黒崎山、木は島津・高須各村のものをつかい、柱石は古賀村から切り出した。坂の割石には山鹿城山の洲口のものを使用した。材料を運ぶ川船の支配は山鹿の岩崎清兵衛がした。称名寺からは人夫の日用品・大釜・朱塗膳碗三〇名分・味噌・香の物・大根漬などを届けてきた。賄所は油屋十兵衛が引きうけ、料理人三名を置くことにした。遊行上人の宿所は金台寺、御附衆の町内の宿割りも定められた。遊行上人は石州益田から津

和野・山口・下関の道順をとり、三月下旬小倉に着いた。四月十日御先使三名が芦屋にきて今浦利兵衛方に泊まった。藩からは財用方石川源次・宇美小兵衛・藪角右衛門が芦屋に出張した。上人逗留中の世話や警備にあたるのは郡代山中其六と代官権藤である。遊行上人は四月十四日朝黒崎に着いた。覚阿は旦那中三名をつれて挨拶にゆき先に帰寺した。同日午後、上人一行は芦屋に着き、金台寺で役人との対面が行われた。上人逗留中は無遠慮参詣はまかりならぬと触れ出されていたが、当地は初の御移りゆえ、一般の参詣は自由ということになった。御着きの夕には芦屋町の若者・子供二〇名が給仕人として出ている。遊行上人滞在中は寺社奉行も芦屋に来るし、また別に藩から見舞の使者も派遣された。称名寺からも使僧がきた。上人は十八日鎮主権現に参詣し、二十日は光明寺に招かれて靈誉の接待を受けた。芦屋・山鹿の住民のなかには、剃髪刀願いを申し出て許され、剃髪の執刀をしてもらった者もいる。亡父十三回忌の回向をしてもらった者もあった。出発の前日、遊行上人から役人等へ下され物があり、また手附・大庄屋・庄屋・組頭・料理人にいたるまで御名号一幅を下された。大願寺（山鹿）称養寺（上上津役）吉祥寺（香月）西光寺（浅木）西光寺（糠塚）宝樹院（山田）など近郊の寺々えは、同門ではないが末々まで御願いという口上もあつた。遊行上人が芦屋を発つたのは四月二十三日朝である。金台寺本堂で三礼拝御十念の後出発した。覚阿は旦那中といっしょに新町

口まで見送った。藩から来ていた役人たちはすべて上人の供についた。(芦屋町誌)

◎石門柱 | 大正五年(一九一六)一月 江嶋 徳太郎

◎総門 |

◎鐘楼 |

◎石燈籠(暗照) | 明治四十二年(一九〇九)三月

◎本堂 | 江島 徳太郎 小山 藤七妻しげ

遠賀 川西四国第八十五番札所

本尊 聖観世音菩薩

◎子安地藏 | (町指定有形民俗文化財)

(説明板)

この大地蔵(坐像)は総丈け二メートル四十三糎木彫金箔のもので、江戸時代中期の作と伝えられているが、同時代の彫刻では県下でもすぐれた作の一つである。左手に宝珠、右手に錫杖を持っている。愛宕地藏または將軍地藏と呼ばれるものである。又体内には源頼朝が在世中、出陣にあたって着用の兜の内にしこんで念持の守仏としていたと伝えられる、鑄鉄の地藏様(高さ二十糎)が安置されていた。今は胎内仏のこの地藏は取り出して本堂の方に祀られている。※この地藏は大地蔵の胎内にあつたことから腹帯地藏ともいわれている。

◎故 吉田 保 警 部 補 殉 難 之 地 の 碑

昭和二十八年(一九五三)四月 黒山 高磨 他

(碑文)

故吉田警部補は昭和二十六年(一九五二)四月二日正午頃、銃を擬し立向う拳銃魔原田国雄に対し、単身これを逮捕せんと右手に手縄を振り上げ格闘中不幸兇弾にたをる。依つてその功績を記念し町内有志の発起により之を建つ。

※吉田保警部補の殉職

金台寺墓地下の野菜畑の番小屋に、怪しい者がひそんでいるという町民の知らせに、芦屋署では直ちに三人の警察官を現場に急行させたが、怪しい人影は見当たらなかったから二人の警察官は帰署し、吉田巡查だけが附近に残っていた。正午ころ、吉田巡查は金台寺墓地に拳銃不審の者を発見した。捕えようとしたら拳銃をつきつけて抵抗するので同巡查はこれを追い格闘になったが、同墓地内で相手の兇弾にたおれた。犯人は当時拳銃魔と騒がれた原田国雄である。(芦屋町誌)

◎吉田 千鶴 之 墓 | 文化十三年(一八一六)八月

(墓誌銘訳文)

千鶴ちづる通称は順平、江州彦根の人なり、丹青を善くす。少にして皇都に遊び、吉田氏の家を嗣ぐ。故ありて遠く吾に遊び、芦屋に家すること二十余年なり。性隠を好む。然も美名いよいよ顕れ、画力頗る神奇なり。時に文化十三丙子(一八一六)八月六日没す。年四十九歳。今茲、天保己亥(一八三九)井原臥山君、首として議して諸士に謀り、力を費せて碑を芦屋金台寺下に建つ。

※吉田千鶴は花鳥・人物・虫魚等を画くの長じておつたが、就中、人物に至っては師の岩駒を凌ぐ技りようをもつておつた。二十数年間芦屋に居住していた為、その間千鶴の教えを受けた人も数多くおつた。宗像芦屋・二村洞山・宗像雲閣・中西耕石・守田洞山・波多野春鎮・倉野煌園等々大家が次々に輩出した。茶道もまた千鶴の後を受けて、明治・大正時代までは非常に盛んであつた。千鶴は芦屋文化の恩人で、門燈籠の創始者でもある。現在も当地で八朔賀の配りものに添える二匹馬の刷り画があるが、当初の元本は千鶴の作であるといわれている。

(芦屋町誌)

次

◎麻生氏の墓群(と云い伝えられている)――
 ※金台寺時宗過去帳――
 時宗遊行派である金台寺には永禄二年(一五五九)九月二十六日、麻生次郎が切腹し、母・乳母・妹などが殉死、自害また家来も共に打死にしたと云う、過去帳が残っていて次のように書きしるしてある。

次郎殿 重阿弥陀仏 永禄二年九月二十六日
 前麻生殿 御ハラメサル(御腹召さる)
 同御ウバ 音一房 永禄二年九月二十六日
 同次郎殿母 佳一房 永禄二年九月二十六日
 チカ申(自害)
 同イモト(妹) 間一房 同 二十六日

入江助三郎 昭阿弥陀仏 永禄二年九月二十六日

次郎殿伴シ打死

金生殿母 土一房 永禄二年九月二十八日

同宗麟禅定 永禄二年□□

前麻生殿華琳源英居士 天文十二年七月□□

※麻生次郎の事蹟は不明であるが、弘治三年(一五五七)から永禄二年(一五五九)には、毛利元就が大内氏を攻め滅ぼしている。大内氏の被官(家来)であつた麻生興益の立場は逆転しているの、麻生次郎が切腹したと記してあるこの過去帳はこれに因連があるのではないだろうか。

※麻生次郎三百回忌――

安政七年(万延元年、一八六〇)は麻生次郎が攻められて切腹し、いっしょに母・妹・乳母・家臣入江助三郎・金生殿母なども死んでから三百年目にあたる、この過去帳が残されている金台寺で、安政七年二月二十四日から三月一日まで、麻生次郎殿三百回忌法要が盛大に執行された。

麻生次郎の憤死を悼んで血縁者・家臣・壇徒・金台寺住職などが集まり供養したものである。二月二十四日から三月一日まで別時念仏法会が勤まり、住職至阿上人ほか光明寺住職など近隣の僧侶四人がこれに当つた。法要中芦屋・山鹿在住の者六人によって、昼夜二回音楽の納供も行なわれている。参詣者も多くこれらの人々へは毎日二度にぎりめし・にしめの接待がなされた。

三月一日は九ツ時(十一時〜十三時)から焼香が行なわれた。

この名元帳には麻生の旧臣林与三左衛門尉の末孫林清三郎打死にした入江助三郎の末孫入江圓助らの名が見え、本城村からも林勘助らが来ている。在町惣目那中・門前百姓中など五〇人ちかくの者が焼香を行なった。また次郎殿など六柱の御霊に大塔婆五本、尊碑一本もあげられた。未刻（十三時〜十五時）から御茶がふるまわれ、夕方には旦那中・門前百姓中・世話人中五〇人余りに茶漬ふるまいがなされた。翌二日には山鹿浜中勘右衛門・芦屋下河辺文十の門弟十一人によって生花奉納があり、三百回忌の法要は終わっている。この間、越野守任を中心として追悼歌会が催され、麻生与右衛門尉朝尊・麻生孫九郎朝益・林清三郎など麻生や旧臣の末孫、芦屋・山鹿在住の者三〇余人によって歌が詠まれた。この時の歌は「蓬草」としてまとめられ金台寺に奉納されている。（芦屋町誌）

※蓬草 一

万延元年（二八六〇）二月に営まれた麻生次郎殿三百遠年回忌にあたり、奉納された和歌・漢詩・俳句の一卷であって、越野守任の序文に初まり、和歌三十首・長歌一首・反歌一首と俳句四句と続き、藤原保親の奥書と和歌一首で一卷となしているものである。（崗二号 藤本春秋子）

◎烏居（熊野大権現）―天保七年（一八三六）九月

門前 甚助

祭神 熊野三神

（裏の墓地に）

◎吉田磯吉の父母の墓 一

大正二年（一九一三）十月 吉田 磯吉建之

※吉田磯吉翁のこと

遠賀川といえば「川筋男」という言葉が返ってくる程、その異名は全国的なものであったが、それを代表する人物に吉田磯吉がおる。「西日本一の大親分」とか「任侠代議士」などといった人であり、昭和十一年一月十七日七十九歳で亡くなったが、その勇侠ぶりは代議士になってからも発揮された。

生れは芦屋町の農家で幼名磯吉のち徳右衛門と改む。家が貧困であったため、幼少から魚や野菜の行商をしていた。十六歳で川船船頭になり二十五〜六歳まで船頭をしていたが、腕力と胆力とでしだいに遊侠の徒の間で重きをなし、若松に移ってから明治三十三年二月、江崎満吉・江木弥作らとの決闘に勝って名を上げた。

発展途上にある若松港の会社・商店などの防営のため起って戦ったわけで、決闘のとき吉田方は一〇名内外相手方は七〇余名だったという。

世間的に知られるようになったのは、若松に出でからで終世この若松が本拠地になった。荒っぽい石炭港の若松で会社の用心棒役で売り出し、大正四年四十九歳の時に代議士（衆議院議員）に当選し、六十六歳で勇退するまで、国会で任侠政治家と目され活動した。その間数々のエピソードも多かった。

大正十年日本郵船事件などはその代表的なもので、日本郵船を政友会が乗っ取ろうと総会へ壮士を送りこんだ時、山県有朋の頼みで吉田一家が乗りこみ、その野望をつぶした事件である。さまざまなトラブル解決の手腕は実業界でも大いに発揮され、石炭・運輸・魚市場などの経営でも成功している。

(芦屋町誌・芦屋ガイドブック)

元若松市長であった吉田敬太郎氏は彼の長男にあたる。

◎刀根 午 吉之 碑 — 昭和十五年(一九四〇)三月

世話人

吉田

徳藏

小田

吉松

山田 梅三郎

三浦

初太郎

福田

末吉

徳田 吉之助

塩田

久次郎

橋本

慶三郎

井上 安太郎

井上

吉太郎

塩田

平次

中西 儀七郎

堀江

春雄

刀根午吉は芦屋砂舟同業組合の組長であった。当時船船は約一六〇、船頭は一三〇名ほどだった。

◎三浦 忠 平 君 之 碑 — 昭和六年(一九三二)八月

(碑文)

福岡県折尾土木管区事務所職員一同

君資性温厚篤實夙ニ志ヲ立テ東都ニ学ブ。大正十二年折尾土木管区ニ奉職格勤ヲ以テアリ。昭和六年二月福岡県社会事業トシテ北九州失業救済八幡市内国道路面改良工事行ハレ披露セラレテ第三班長トナルヤ斃レテ後止ムノ悦ヲ以テ夙夜奮闘其ノ功績顕著ナリシニ不幸中途ニシテ病魔ノ襲フ所トナリシモ尚身命ヲ顧ミズ駆勉力行終ニ七月一日職ニ

殉ズ齡僅ニ三十。誠ニ可惜寔ニ同志相謀リ碑ヲ立テソノ梗概ヲ録シテ永久ニ英靈ヲ慰ム。

67

トモ 綱 石 — (旧中小路) 西浜町九一三

嘉永四年(一八五二)九月 世話人

萬屋

□□□

保正

江藤

與四郎代

船着場の道の両側にある。近世回船問屋の繁栄と全国各地へ活躍した帆船港を物語ってくれる。

68

今に残る商家 — (旧中小路) 西浜町九一六

この通りは昔上方と取り引きをする商家の中心街として繁栄していた所で、昔時は燻燻・焚石(石炭)・陶器・米・鶏卵・干鰯などをさかんに上方へ積み出していた問屋の家が建ち並んでいた所である。そのため屋号をもった多くの商家が軒を並べていた。

この吉田材木店は、文久年間の創業で今から四代前である。この家は明治三十七年に建築されたものだが、昔時をしのげる唯一の建物である。材木店入口を奥に行くと花崗岩の敷石が家の中から川の中まで傾斜をつけて敷きつめてあり、船が家の中まで入るようになっていたが、今は川岸を埋めたのでそれも地中に埋め込まれてしまつて今は無い。ちなみにこの家は現芦屋町長吉田徳久氏の生家である。

69

垂間野橋の跡の碑 — (旧中小路)

西浜町八一〇

(碑文)

貞原益軒撰の筑前国統風土記に「むかし芦屋と山鹿の間東西に渡せし往来の橋也。今はなし」と記されている。垂間野橋は太宰管内誌など種々の文献に見える。金台寺は「垂間道場」、寺よりこの橋に至る横町は「垂間野筋」と呼ばれていた。遠賀川では時代的に最も古い橋であったと推定される。

※浜崎浦の石波止の項に記したる如く

此の波止明治十二年の頃に破壊し、同二十四年の大洪水にて大破損を来せしかば、西風の為め海中の白砂藻内に浸入し、山鹿浦の海岸に高洲を生じ、漸次に上り渡場をも埋めんとし、芦屋の浜崎下も同じく洲を生じ、両郷間僅かに数間となれり。

(また)

彼の仲哀天皇の「自山鹿脚廻之入崗浦」と書紀に記されたる崗水門と称するは、今の芦屋藻には非ざるべし。往古は今の藻は河口浅く渡場の辺は葦など生茂りて巨船大船などを容るべき藻にはあらざりしが如し。

上古の崗水門は山鹿の狩尾岬と洞山との間より入りて、芦屋の祇園崎より浜口の辺にて……東は猪熊、古賀、杵・頃末辺までの入海の口なるべし。

垂間野の橋の如きも、近古船舶の輻輳せし水深に、かて、加えて西風猛烈なる藻内に於て、目下の如き工学の進歩せざる時代に架橋せんこと夢かのう間敷(前述の如く浜崎浦の波止なき時は、芦屋側と山鹿側に洲を生じ其の間僅かに数

70

間となれり)葦立の浅水なればこそ橋も架けつらめとおほえぬ。仍て記して後の編者の参考とはなしぬ。(遠賀郡誌)

福岡藩 焚石会所跡の碑

(旧金屋町) 西浜町八一八

(碑文)

福岡藩では天保八年(一八三七)焚石会所を此の地に設け藩の独占事業とし、財政を助け一部は窮民の御救貸金に使われたが、明治新政府となり石炭の自由採掘が許され芦屋焚石会所は明治五年(一八七二)遂に廃止された。

※役所としての焚石会所は無くなったが、会所の建物は明治八年(一八七五)以来芦屋で活動した石炭商安川敬一郎の「安川商店」の事務所として使用された。ちなみに安川敬一郎は明治十六年(一八八三)より芦屋郵便局長として勤務している。

※石炭の発見についてはいろいろの説がある。文明十年(一四七八)ころ、遠賀郡香月村の畑山金剛山で土民が黒石を掘り出して薪用に使っていたとか、杉七郎太夫興利がそれを篝火に用いていたとか言った文書もある。遠賀・鞍手の石炭山の口碑では、遠賀郡埴生村の五郎太がはじめて燃える石を発見し、それから住民達が脈をさぐって掘り始めたといえられている。三池郡ではすでに文明元年(一四六九)稻荷村の農夫伝治左衛門が発見していたともいう。

※石炭は十五世紀ころ発見されて薪用・篝火などに使われていた。まだ私人の家庭用燃料としてであって、産業化され

てはいなかった。当時は燃石・石炭・烏石・焚石・焼石・燻石・生石・石などいろいろな名称で呼ばれていた。瓦屋・製塩業者・火薬製造業者など小工業者が使いはじめ、しだいに産業化されてくるのは享保(一七一六)ころからである。

※石炭の産出・販売が盛んになるにつれて、藩ではこれの統制に乗り出すことになった。文政年間、芦屋と若松に会所が設けられた。芦屋会所の設立は文政九年(一八二八)一月である。以後、遠賀・鞍手・嘉麻・穂波四郡の石炭は、すべて芦屋会所で取り引きされ、若松へ行く石炭は塩田用にかぎって芦屋会所で許可をあたえ、堀川を通すことにした。若松へ無許可で石炭を運ぶ船は嚴重に吟味された。違反船は船をさしとめ芦屋会所へ届け出るようにと示達されている。芦屋会所を通さぬ石炭の相対売りは禁じられていたが、一部の地域にかぎって例外が認められていた。若松・修多羅両村の塩浜・山鹿・養住・高須三村・芦屋町の瓦屋用のものや、黒崎田町・山鹿魚町・芦屋町・若松村などで入用な石炭は、山元との直売買が許されていた。

文政十三年(一八三〇)若松にも会所がおかれた。しかし当時は「芦屋会所」「若松会所」とあるだけで、まだ「焚石会所」の名称は使われていない。両会所の組織・運営方法は明らかでないが、これは藩の石炭独占体制の先駆をなすものであった。※石炭はただ家庭用としてではなく、製塩・製瓦・手工業とも結びついて、かなりの販路を広げていた。天保初年には大阪の鍛冶業にも利用されていたという。需要が多くなるにつ

れて、筑前の石炭採掘量はしげんに増加し、天保の頃には年々六、〇〇〇斤かう七、〇〇〇斤に達したという。販路は領内外におよんだ。石炭の乱掘がおこなわれ、採掘・運送・販路・収益配分などで業者間の争いが絶えなかった。また江戸中期以後、農村が疲弊し、田畑を失った筑前の農民達は、浮浪化して各地炭鉱を渡り歩き不安な生活を送っていた。藩では彼等を救済する社会事業の一端として、石炭事業を安定させる必要もあつた。藩の財源にするためでもある。

藩営の動きは文化年間からあつたが、その根本的な確立を藩に建言したのは松本平内である。天保年間、藩の財政は悪化していた。時の財用方白水要貞は、石炭を藩営にして財政難を切りぬけようとはかつた。筑前の石炭すべてを藩営会所の独占にするため、天保八年(一八三七)石炭仕組方が実施された。先に芦屋・若松に設けられていた会所は、正式に「焚石会所」と呼ばれるようになった。藩では三〇項に及ぶ「焚石会所作法書」を両会所に配布して、嚴重な訓令を出し、石炭業一切が藩役所の支配に属することを領民に示達した。

(芦屋町誌)

71

県立蘆屋中学校校跡の碑

(碑文)

芦屋町庁舎裏のテニスコートの西北隅

県立芦屋中学校は福岡・久留米・柳川・豊津・甘木の名中学校と共に明治十三年(一八八〇)に創設され、四年制を採用し赤間・直方に分校をおいた。明治十八年県財政の窮迫により

惜しくも廃校となり、公立涵泳学校となるも同十九年遂に閉校した。修学途上で学窓を去った生徒や先生方の心情を思い、創立に尽力した町民の教育に対する情熱の深さを偲びこの碑を立てる。

※県立芦屋中学校を設置するときには、遠賀郡を中心にした地元民の熱心な誘致運動が行われている。他の五中学はみな藩校という前身があったが、芦屋中学はまったくの新設であり、設置には巨額の費用が必要であった。このため郡内の有志が芦屋で何度か会合をもち、郡民の努力により寄附金を集めて明治十三年金屋に校舎を建築し、県へ献納したのである。

授業料は年五円五十銭を原則としたが、ほかに三円五十銭・二円の二等級が設けられ、これが経費の一部ともなった。

※当時の中学校は、この地方では最高学府的な存在であり、今日の大学に入学する以上の魅力と尊敬を受けていたという。芦屋中学校の所管は遠賀・鞍手・宗像の各郡で、直方分校・宗像分校がある。

※涵 泳 中 学 の 設 立

県立芦屋中学校は、地方財政の貧困もあって維持がむづかしく、明治十八年三月、設立後六ヶ年をもって廃校のやむなきに至った。しかし地元では入学生徒一〇〇余名のまゝ廃校するのを惜しみ、存続を望む声が強かった。遠賀郡全都連合町村会では、このまゝ中学校を公立として経営していくには多額の費用を要したので、高等の学校に入るための変則中

学な涵泳学校を、中学の跡に設置することを決議した。小学中学科卒業以上の能力ある者を入学対象として、明治十八年九月十一日に開校された。修学年限三ヶ年で授業料は一人一ヶ月二〇銭。郡内全域が入学範囲とされたため寄宿舎が設けられた。せつかく設立された涵泳学校も財政難の理由で廃止され、その跡に遠賀郡町村立高等小学校を開校することになった。涵泳中学はわずか半年で廃校されてしまった。

72

芦屋高等小学校跡の碑

(碑文)

明治十八年県立芦屋中学校廃校のあとに涵泳中学校となり、同十九年郡下唯一の高等小学校となり、生徒数の増加に伴い寄宿舎を設け黒崎に分教場を設置し、修業年限を四年にし、二年の補習科を設け、同二十二年に准教員養成所を附設、同四十年遠賀郡全町村組合解散により芦屋町立となる。昭和十六年国民学校と改称、同二十二年芦屋小学校となり、同四十二年に白浜町の新校舎に移伝した。

73

備米蔵の碑 (旧金屋町) 中ノ浜六十八

萬延元年(一八六〇)九月

備米蔵は海雲寺下の金屋町隅ノ倉^{すゐ}というところに建てられていた。備米というのは凶作にそなえ、窮民救済のために貯えた米のことで、この石標には発起人を含めた五十七名の名前

が、供出した米俵数と共に記されている。万延元年九月、福岡の石工市平に作らせ建立したものである。発起人は庄屋（大庄屋格）江藤与五郎信照、組頭（大庄屋格）小田休五郎信行ほか五名で米俵数は最高五〇俵、最低一俵である。備米総数八四一俵であるが、備米を供した者は商人が大部分で、四十俵以上が六名、三十俵以上が六名、二十俵以上が六名、十俵以上が九名となっている。（芦屋町誌）

備米蔵 発起

庄屋	大庄屋格	江藤	與五郎信照	同参拾貳俵	和田	武平
組頭	同	小田	休五郎信行	同参拾俵	柴田	清三郎
同	同	柴田	清三郎有年	同参拾俵	吉永	茂七
同	同	村田	平次郎智房	同参拾俵	桑原	甚五郎
同	同	江田	喜右衛門幸定	同貳拾四俵	有田	久平
同	同	高崎	儀助基弘	同貳拾四俵	江田	喜右衛門
同	同	入江	圓助篤實	同貳拾四俵	高崎	儀助
米拾俵	同	江頭	與五郎	同貳拾四俵	入江	圓助
同五拾俵	同	桑原	傳次郎	同貳拾四俵	松吉	源治
同五拾俵	同	江田	與平	同貳拾四俵	和田	只平
同四拾八俵	同	小田	休五郎	同貳拾四俵	安高	安兵衛
同四拾八俵	同	坂口	平四郎	同拾五俵	小野	傳右衛門
同四拾俵	同	太田	源次郎	同拾三俵	東屋	儀三郎
同四拾俵	同	中西	善藏	同拾貳俵	米屋	源右衛門
同参拾貳俵	同	小野	清次郎	同拾貳俵	紀伊國屋	藤石之門

あるが記録にない。山鹿側も山鹿左近掾という釜師と、大江姓や太田姓のある名工が出た所で、こゝにも二、三ヶ所はあつたであろうというのは噂だけで証拠はないが、たしかに釜座のあつたことは否定することは出来ないだろう。山鹿地区では、最近鉢澤が多量出土された、田屋区重岡重俊氏宅の裏ではなかつたかという説が濃厚である。それらしき石祠があり今でも毎年フイゴの神を祭る行事が行われている。そのほか山鹿元町の出口という所に野鍛冶があつたが、その屋号が釜屋といふ、また釜屋屋敷とも称せられていた。この家は昔芦屋釜を鑄造していた家柄と伝えられていたが、他村へ移住して今は現存していない。(慶応二年生れ鶴原吉三郎氏の談)

※明恵上人が宗から帰朝のとき中国の技術者を連れて来たものと言われるが、その技術者が芦屋の俗言でいう「鑄かけ屋」に教えて、砂鉄採集から製鉄技術までを充分研究して、後に名工(大工・小工)を産み出すまでに飛躍的發展の緒についたものと考えられる。

※芦屋釜が鑄工技術ではすぐれていたと言ふことは、あらゆる学者たちや研究者たちが異口同音に立証されているが、これは芦屋釜の特長とでもいえる「引中心ひきまなこ」という製法があつて他所にはこの技術をもつ釜師はいなかつたという。筑前土産志によれば「天明釜も名産なれども芦屋に及ばず、京・江戸の釜匠も芦屋流に伝うる引中心と言ふ精巧の法を知らず」と書いてあるが、この芦屋釜独特の技術が芦屋釜にあつたので、優秀な作品が出ていたものに間違いはないようである。

(芦屋町誌)

※太田氏は山鹿に居住し、菊桐の御紋の釜を鑄て宮中に捧げ山鹿左近掾と称せられたが、世の茶人が菊の釜・桐の釜といつて珍重するのは、実にこの釜から起つたのである。

古い芦屋釜には、雪舟や土佐・狩野初代の画匠の画を鑄入したものがあり、如何にその品位を認められていたかを知ることが出来る。足利義政の頃、所謂東山時代が出現し茶の湯が流行したが、茶釜の需要と共に芦屋釜が流行し、雪舟の描いた松杉・梅竹の画・瀟湘しやうきやうの模様の入つた芦屋釜、土佐隆信の芦雁、狩野光信の放れ駒等の下絵のある鎔範は、名匠の作と共にひろく珍重されるようになった。茶の湯は織田信長・豊臣秀吉に至つて益々盛んになり、千利休のような名人が出たが、何れの時代にも芦屋釜が用いられ珍重されたのである。

※芦屋釜の原料は附近海岸の砂鉄であつたが単に砂鉄ばかりでなく、梵鐘や鏡その他仏像・鳥居等の中には青銅で作られたのも数多いのである。

※芦屋釜は鎌倉以来江戸中期まで四百有余年の間鑄造されて茶の湯釜の元祖とまで言われていたが、寛永年間太田新佐衛門を最後として断絶した。然し芦屋の鑄工師が国内の津々浦々に転住しているが、これ等の工人は当然転居地で芦屋風の技術を以て茶の湯釜や青銅品を鑄造したと思われる。

※「稻崎釜いなか破故」に依れば、寛永七年(一六三〇)上石川五右衛門死後三五年下浅野彦五郎が釜煎りの罪に処せられた翌八年將軍家光が惨酷な道具に使つたという理由で、その鑄造を禁じたと云われている。(芦屋の葉・芦屋町誌)

75

入江徳郎氏の生家―(旧金屋町)

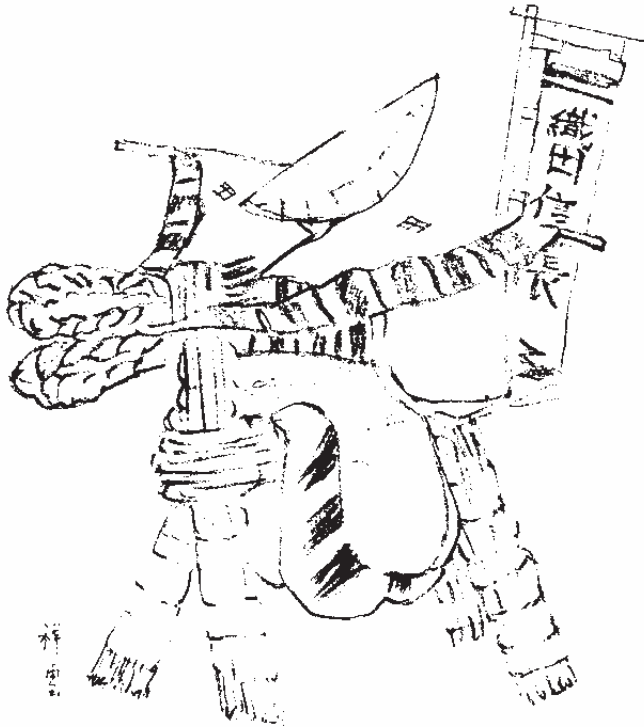
中ノ浜六一二一

朝日新聞の記者から論説委員などでも活躍した人で、今はテレビのニュース解説者としてR. K. B. 六時半からのニュースコープで画面にも出て大いに活躍している。

76

芦屋橋―昭和十五年(一九四〇)三月

大正六年(一九一七)に架けられた旧芦屋橋は昭和十年(一九三五)六月の大雨にて橋脚が洗われ地盤が沈下し、年々橋架が下ってゆき、中央部が屈折して用をはたさなくなつたので、県によって新たに架橋が計画され、旧橋から約一七五メートル下流にこの芦屋橋が架設された。全長二七〇メートル、幅員六メートルのコンクリート製である。新芦屋橋が竣工したのは昭和十五年三月末である。その後新芦屋橋は自動車の通行が多くなつたので、幅を拡張して人道が造られた。人道の完成は昭和四十二年三月である。山鹿側の橋の欄干にその年月が刻まれている。(芦屋町誌)



八朔節句の配り馬(藁馬) (本文三九頁参照)